ニューズムック GO OUT Livin' Vol.17 2023年3月11日発行

キャンプ好き、セルフリノベ好き、ローカル好き。自分流に楽しむ趣味人の家と部屋。

GO OUT Livin'

Vol.17

「好きなこと」と、部屋。

おしゃれで楽しい、趣味人たちのインドアスタイル。

理屈では、何かを好きにはなれない。

じぶんに素直に、好きなように暮らせる家がいい。

「住む」より「楽しむ」BESSの家

株式会社アールシーコア BESS 本部 〒153-0042 東京都目黒区青葉台1-4-5 www.bess.jp

BESS

GO OUT Livin' Vol.17

Contents

004 おしゃれで楽しい、趣味人たちのインドアスタイル。

「好きなこと」と、部屋。

01 だからこその居心地。すべてが"感覚"のセルフリノベーション。／静岡県藤枝市
02 家中のどこからでも野尻湖を一望。趣味のサウナを存分に楽しむための家。／長野県信濃町
03 90 年代のストリートカルチャーに囲まれた、秘密基地のような自宅空間。／新潟県村上市
04 フラットにして趣深く。開放的な平屋に映える、ヴィンテージ家具。／神奈川県横須賀市
05 ワークスペース&リビングを兼備した、古民家リノベーションの好例。／新潟県新潟市
06 好きなエッセンスを散りばめたリビングと、ストイックに仕上げたアトリエ。／東京都世田谷区
07 細部にまでこだわりを感じる、温もりのあるアメリカンヴィンテージな空間。／新潟県新潟市
08 インスピレーションを刺激する、緑のカーテンに囲まれたアシンメトリーな部屋。／群馬県桐生市
09 愛犬と共にのびのび暮らす、平家と納屋とソト遊びのイイ関係。／茨城県つくば市
10 開放感溢れた空間に、さりげなく家主の趣味が見え隠れ。／神奈川県藤沢市
11 異素材が隣り合い、アートとキャンプが溶け合う。家主の趣味をミクスチャーに。／大阪府大阪市
12 伝統工芸×マクラメの化学反応。異文化ミックスの住まい。／東京都東大和市
13 何事も Do It Yourself！ キャンプの醍醐味を伝える、エバンジェリストの家。／埼玉県秩父郡
14 どこを見ても好きなものが目に映る、セルフリノベーションの部屋。／東京都世田谷区
15 独特な外観デザインにひと目惚れ。仲間とフルリノベーションした築 67 年の家。／兵庫県神戸市
16 開放的にユニークに、家主の自由な発想で色づけする"OLDK"。／埼玉県春日部市
17 外遊び好きの憧れ。"手間ひま"を謳歌する、ログハウスの暮らし。／群馬県太田市
18 "好き"を詰め込むからこそ。頻繁な模様替えがもたらす、住まいへの愛着。／千葉県柏市
19 ここは皆のシェアスペース。おのずと人が集う、現代解釈された古民家。／京都府京都市
20 肩肘張らないハイセンス。そのバランスの秘訣は D.I.Y. と客観視。／群馬県伊勢崎市
21 趣味を楽しむ余白を残した、トレンドに左右されない家。／神奈川県茅ヶ崎市
22 有名建築家の手掛けた、ミニマルなミッドセンチュリー空間。／新潟県新潟市
23 季節とともに移ろう、ウッドに囲まれた薪ストーブのある暮らし。／静岡県焼津市
24 ナチュラルな空間にアウトドアが差し色。"食"を提供する住まい。／東京都江東区
25 気取りのなさとスマートさを同居させる、ホンモノ志向と緻密な計算。／熊本県熊本市

101 趣味や仕事を自分流に楽しむための、こだわりの家たち。

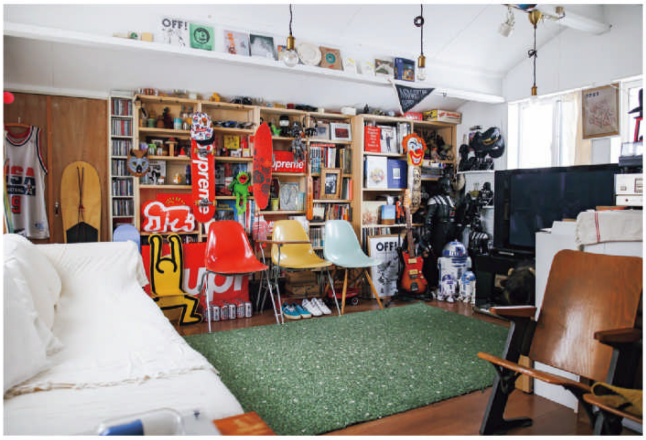
家のブランドカタログ。

Living With
My Favorites 2023

おしゃれで楽しい、趣味人たちのインドアスタイル。

「好きなこと」と、部屋。

必要なギアを持ち出して作るテントサイトとは違い、ジブンのすべてが見えてしまうのが自宅。神は細部に宿るなんて言葉どおり、ちょっとしたフィギュアだとかうっかり買ってしまったスツールとか、本当に些細なものにまで趣味が反映されてきます。そんな超プライベート空間を“好き”で満たすことができたら、きっと家がもっと好きになるはず。今回も、ジブンの好きなものに囲まれ家で過ごす、至福の時を満喫する25名に登場してもらいました。部屋の隅々にまで家主の趣味が反映されたオシャレ空間、読み終える頃には今すぐジブンの部屋も改造したくなること間違いなしです。



01

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

会社員
西山昌人さん

SPEC

居住地域 ： 静岡県藤枝市
居住形態 ： 一戸建て(持ち家)
間取り ： 3LDK＋土間＋店舗
居住年数 ： 4ヵ月
築年数 ： 27年

「土間を造るために床を抜いたんです。でも、縁側だった部分だけは高さを残し、小上がり風に仕上げています」。さすがは縁側を生かした造りとあって日当たり良好。植物もすくすくと育ち、鮮やかな葉っぱのグリーンがウッドの壁とも原色のキャンプギアともマッチ。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya

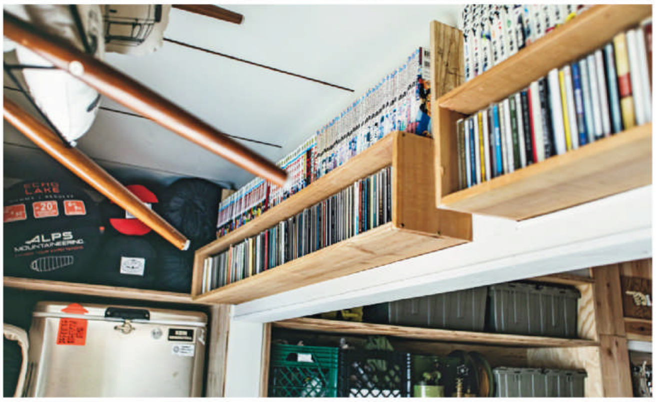
だからこその居心地。すべてが“感覚”のセルフリノベーション。

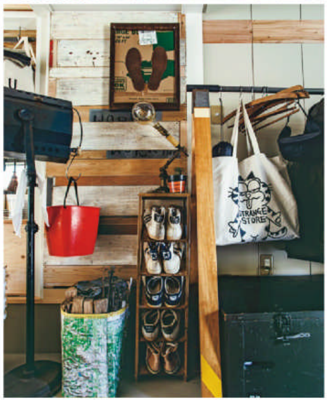
西山さんは無類のキャンプ好き。土間に設えられたラックに収納されているのも、その多くがキャンプギアだ。「ギアを手作りするのが好きなんです。モノづくりって単純に楽しいし、それに自作なら絶対に人と被りません」というD・I・Y・精神は、住まいにも存分に息づいている。

西山さんは中古の戸建てを購入し、その9割方をセルフリノベーション。「設計図なんて引かず、すべてが感覚任せ」と笑って話してくれたが、感覚任せのラフさこそが部屋の表情を形づくる。OSB合板に杉板、さらには不要になった手製のギアを解体し、その古材をリユース。色合いも木目も異なる板をランダムに張り付けた土間の壁が気取りなく、嫌みのないメリハリをプラスしている。

そして住まいの心地よさを決定づけているのが、新旧に偏りすぎないバランス感覚。「ピカピカとした新品の質感も、ヴィンテージ感を強く打ち出したようなインテリアも、どちらも苦手」という言葉を裏付けるように、リノベーションの土台となった住まいは築27年。新築でもなければ古民家でもなく、平成の初期に建てられた、ごく一般的な住宅だ。

西山さんは内装の多くに手を入れつつも躯体そのものが持つ面影を大切に、窓に面した土間の小上がりはかつての縁側。このスペースだけは床を抜かず、リノベーション前の造りを継承している。その理由を尋ねてみると、答えは「これもあくまで感覚ですね。日本家屋ならではの縁側って、なんだか落ち着くじゃないですか」。自らの感覚を第一にしたセルフリノベーションだからこそ、西山邸はどこまでも居心地がいい。





1.大工の手を借りながら納戸と和室をひと続きに解体し、ギアのD.I.Y.やメンテナンスも可能な土間に。コンテナが整然と並んだラックは西山さんによる自作だが、「きちんとした採寸すらしていないんです」。この肩肘張らない感覚が、居心地のよさとして漂っている。　2.小上がりの天井近くの壁にウッドのラックをD.I.Y.し、デッドスペースを有効活用。　3.オーダーの建具を用い、玄関の装いもリノベーション。日本家屋に一般的な引き戸を取り外し、戸枠の広さを生かした両開きのフレンチスタイルに生まれ変わらせている。　4.「これもちょっとした思いつき。アメリカ製の段ボールにソールを貼り付け、それを額装しただけなんです」。バンズのソールを用いたアートも自作し、その隣に見えるハンガーラックはソーホースブラケットを用いてD.I.Y.。　5.中央に見える植物がセットされたアイアン製のラックは、意外にもキャンプで使用する五徳だとか。さらに窓際には、折り畳み式の定規で作った"西山"を意味する"WM"をディスプレイ。外遊びや生活の道具がインテリアとして溶け込む様子も西山邸ならではだ。　6.土間とLDKの間には扉を設けず、ワイドな下がり壁によって開放的に、なおかつ緩やかにパーティション。リビングの壁に飾られた"W"のサインレターとともに、下がり壁から見える土間の光景も抜群に絵になる。　7.土間に置かれたバケツや〈トヨトミ〉のストーブはキャンプに持ち出し、アウトドアでも活躍する。

8 11 10 9 12

8.リビングダイニングの壁は「フラットな感じが好きじゃないんです。凸凹としたニュアンスが出るように、あえて雑に塗っています」という漆喰塗装。玄関とのパーティションとして張った板材にもオイルは塗り込まず、こちらもラフに仕上げている。ちなみにダイニングテーブルはオーダーメイド。そこにリサイクルショップから掘り出したソファをコーディネートしている。　9.土間の壁には色の濃淡も節の表情も異なる板材をランダムに張り付け、この不均一さがひとつのデザインとして機能。ウッドの壁に無骨なマテリアルのラックが映えるが、こちらは惜しまれつつもクローズした藤枝の名店『コネクト』から譲り受けたそう。　10.シックな面持ちのスタンドライトがセットされているのは、かつてのカウンターテーブル。カウンターテーブルを生かしながら収納ラックとして生まれ変わらせた。D.I.Y.こそのラフなウッドのニュアンスに、天井から吊した植物のグリーンが映える。　11.西山さんの住まいはパートナーが経営するまつエクサロンを併設。サロンの内装も西山さんが手掛け、ホワイトに塗装された杉板の壁がシャビーシックな趣だ。ちなみに壁にセットされているのは、ジョージ・ネルソンのアイコンとも言うべきアイクロック。　12.「自宅もサロンもセルフリノベーションとあって、どうしても荒削り」。張り合わせた板と板の間に生じたすき間にはヴィヴィッドなカラーのペンキを塗り、ちょっとした粗をハイセンスにカバー。

02

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

アースボート代表・LAMP取締役
吉原ゴウさん

SPEC

居住地域	：	長野県信濃町
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	1LDK＋ロフト
居住年数	：	2年
築年数	：	2年

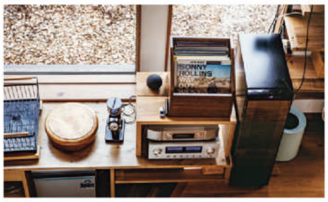
限られたスペースを有効活用できるよう、リビングにはテーブルやソファなどの圧迫感を感じさせる家具は置かず、キッチンカウンターで過ごすことが多い。料理が趣味という吉原さんだけに、友人が遊びに来た際はキッチンに立ってもてなすのが楽しみのひとつ。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Shogo Komatsu

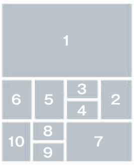
家中のどこからでも野尻湖を一望。趣味のサウナを存分に楽しむための家。

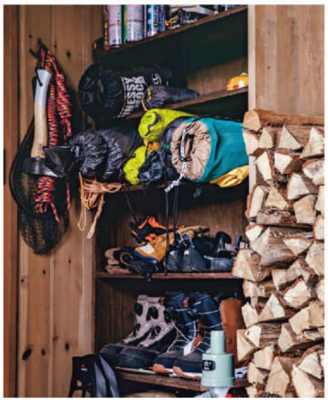
東京と地元の2拠点生活を想定し、生まれ育った長野県に家を建てた吉原さん。だが、近年の感染症の影響で仕事はリモートワーク中心となり、Uターンを決意。生まれ育った野尻湖のそばで、大自然に囲まれた生活を満喫している。「地元に家を建てるなら湖畔がよかった。でも、湖畔の土地は売りに出されることがあまりなくて。ようやく出会えたのが、高台にあるこの場所。眺めはいいけど集落からは離れているし、積雪量も多い。斜面なので、そもそも建設できるのか…と、いろんな側面から暮らしをイメージして考えた結果、出した答えは、なんとかなる。地元の建築士さんに依頼して、家づくりがスタートしました」。もともとは友人を招いたり、のんびりと趣味にふける時間の楽しむために建てた家。東京では叶わなかった吉原さんのロマンが存分に反映されている。

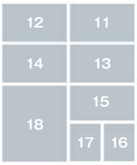
特筆すべきは、野尻湖を一望できるサウナと露天風呂。趣味が高じて、ついには自宅にまでサウナを設置した。さらにこだわったのは、家中のどこからでも野尻湖を望めること。リビングに設けた大きな窓からは、雄大な自然が目に飛び込み、絶景が生活の一部になっている。そして、部屋の床面積を確保するために、お風呂は露天風呂、サウナは外に設置した。それが正解だったと話す。「一旦外に出なきゃいけない生活は、毎日違う天気や気温を感じられて気持ちいい。自然に囲まれた環境で過ごすためにここで暮らしているんだから、外の空気を吸う回数は多いほうがいいですからね」。季節に正直な自然を眺め肌で感じる日々は、ローカル暮らしの醍醐味と言える。



1.室内からの眺望。友人が遊びに来たら景色を見てもらいつつ、吉原さんの料理を堪能してもらうそうだ。 2段の窓から自然光が降り注いで気持ちいい。四季折々の野尻湖は見ていて飽きることはなさそうだ。 2.見せる収納は古材を活用。洗練されたデザインのキッチンツールもインテリアの一部に。 3.趣味の料理を快適にこなせるよう、広く設計したキッチンもこだわりポイント。奥には業務用冷蔵庫が備わっている。縦長の家庭用冷蔵庫と違って、視界を塞がず、景色を邪魔しない。 4.ドリップスタンドは、東京・蔵前にあるデザイン事務所『アロイ』オーナーである友人が製作したもの。ドリッパーを3つ同時に使えるため、大人数の友人を招いても一度で抽出できる。 5.キッチンカウンターは掘りごたつ式にして、椅子を省いた。キッチンを背にし、カウンターにビーズクッションを立てかけ座椅子のように座ることも。 6.部屋に馴染むレトロな照明はバンカーズランプ。その上にディスプレイしている写真は、仕事で訪れた街などを自身で撮影したものだそう。 7.憧れていた暖炉も設置。「薪ストーブに比べると薪の消費も早いので、経済的ではないですね（笑）。でも、家の中で焚き火がしたいという夢が叶いました」。 8.大好きな音楽はレコードでも。近隣に家がないので爆音で聴ける。 9.スピーカーは〈JBL〉の名作、4344。大音量を出せる環境でこそ真価を発揮する。 10.リビングから出れば、すぐに露天風呂。ここが一番のお気に入りスペース。







11.梁のハンガーや壁のフックなど、ここも見せる収納に。奥はロフトに続く階段。　12.ロフトの寝室からも野尻湖が望める。起きてすぐに大自然が視界に飛び込んでくれば、どんな朝も最高の目覚めとなるだろう。　13.遊びに訪れる友人たちからも好評な露天風呂。「屋根を付けているので、雨が降ろうとも関係なし。左右と後方は窓や壁で囲って視界を遮っているので、安心感があります。湖でボートに乗っている人がいても、高台にあるから目線が合いません。湖畔に建てていたら、こんなに開放的な露天風呂は作れませんでした。本当に気持ちよくて、2時間くらい入っちゃうこともあります。サウナの後の水風呂も外気浴も気持ちいいです」。　14.本場フィンランドでサウナにハマり、いつでも入りたくて設置したプライベートサウナも、この家の主役。〈モキ製作所〉のパワフルな火力のストーブを使用している。美しい景色を見ながら汗を流す贅沢なひと時は、なにものにも代えがたい。　15.暖炉とサウナのストーブで使用する薪は1トンもストック。ロマンの燃料となるのだから、薪割りも苦にならない。　16.露天風呂のほか、シャワールームも完備。こちらも外に設置されている。　17.スノーボードをはじめとしたアウトドア関連のギアは、こちらに収納。　18.ウッドデッキは、大工の実弟が製作してくれた。張り出している先端まで行けば、左右と上が開けて、さらに開放感を味わえる。今後は斜面を下った湖畔に、桟橋を作ったりスモークサウナを設置したりする予定。

03

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

フォトグラファー
東海林 渉さん

SPEC

居住地域 ： 新潟県村上市
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 4LDK
居住年数 ： 10年
築年数 ： 40年

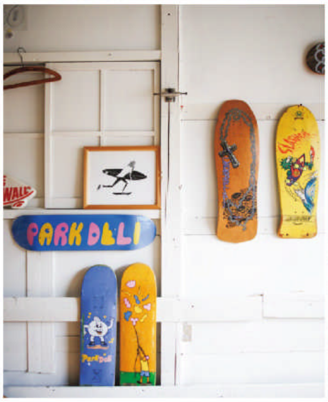
屋根裏にある一室は、東海林さんのプライベートルーム。学生時代から収集していたというスケートボードやアナログレコード、アート、写真集、スターウォーズなどのストリートカルチャーを感じる品々が綺麗にディスプレイされ、まるでギャラリーのような空間だ。

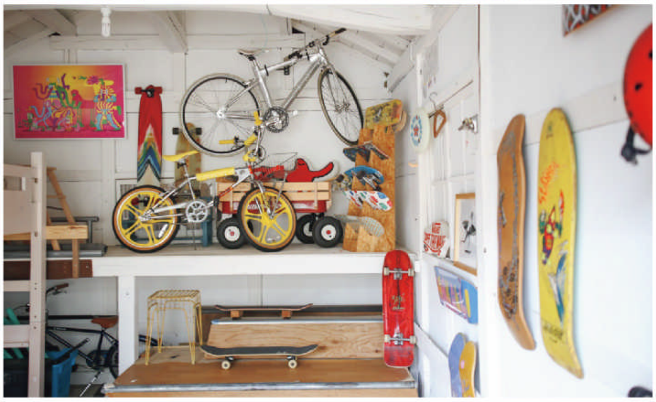
Photo ／ Wataru Shoji（GATAFORNIA） Text ／ Yuho Nomura

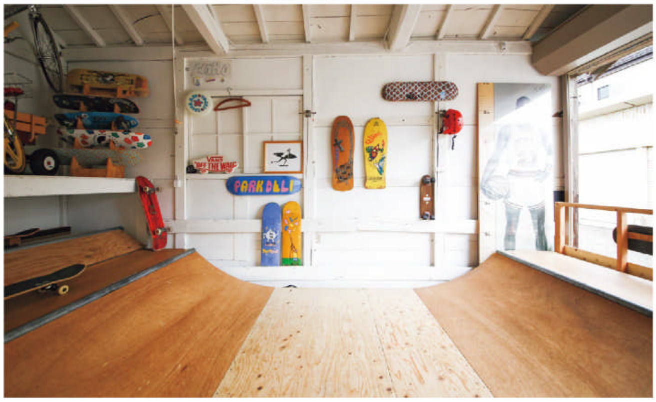
’90年代のストリートカルチャーに囲まれた、秘密基地のような自宅空間。

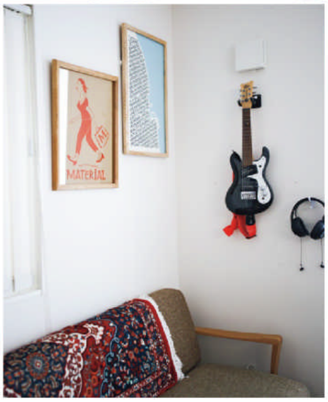
フォトグラファーとして新潟県内を中心に活動する東海林さんは、10年前の出産を機に地元である村上市へ帰省。いつかは故郷で暮らしたいという思いもあり、愛着の深かった生家を一大決心してリノベーションした。かつての面影を残しつつも、家族と一緒に成長していける家を目指し、白壁に覆われた箱型の形状をベースにシンプルな空間を設計。「元々D・I・Y.が好きだったこともあり、ゼロから作り上げていくことが好きだったんです。家も一緒で、最初はテイストやスタイルを決め込まず、何色にもできるよう真っ白なキャンパスをイメージして設計しました。結果的に自分の趣味や子供たちが大きくなった時の趣向に合わせて空間作りやアレンジができたり、時間の経過に合わせた個性が表現できていて、とても満足しています」と東海林さん。その言葉どおり、屋根裏に構える部屋には’90年代のストリートカルチャーに関連したコレクションが所狭しと並べられ、ファン垂涎のレアな雑貨も少なくない。そしてかつてガレージだったというスペースには、スケーターでもある娘ふたり専用のスケートランプを設置。壁を自身で白に塗装し、D・I・Y.好きな仲間たちと自作したという自慢のスペースだ。好きなものに囲まれながら、家族みなが居心地よく過ごせる空間を作り上げていきたいと願う東海林さんのマイホームは、生活していく中で自然とD・I・Y.の楽しさやクリエイティブな発想が得られる場所でもあるのかもしれない。そして、それはきっと東海林さんの想いが込められたこの自宅空間を通じて、子供たちにもしっかりと伝わっていくはずだ。

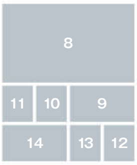
1.屋根裏部屋のコレクション棚前に鎮座するのは、ミッドセンチュリー期の名作、〈イームズ〉のシェルチェア。ストリートカルチャーのアイテムとの相性も抜群で、信号機をイメージしたカラーリングが特に印象的。　2.自作でアレンジした思い入れの深いクルーザーデッキ。真っ赤に塗られたボディに、シックな和テイストのステンシルアートが目を引く。　3.学生時代から収集している大好きなスターウォーズ（特にダースベイダー）関連のグッズ。なかには現在では入手困難なプレミア品も。また現在でも愛用する〈フェンダー〉の名機、ジャガーも大切に保管している。　4.スケートカルチャーに欠かせない〈シュプリーム〉のアイテムをはじめとするスケートボード関連のグッズも多数コレクション。　5.自身の現在の活動にも大きな影響を与えているというストリートアートの英雄でもあるバリー・マッギーやマイク・ミルズ、マーガレット・キルガレンの作品集も。　6.棚の上には新潟にツアーで訪れた際にもらったというレイバービーのサイン入りのEPや、個人的に親交のあるヨギー・ニュー・ウェーブスのLP。ほかにも思い入れの深いアーティストの作品が多数飾られる。　7.家族が集うリビングは、ほかの部屋とは一転し温かみのある北欧テイストに。光が多面できれいに差し込む設計で、〈トラックファニチャー〉の3人掛けのソファに腰掛ければ自然とリラックスした雰囲気を味わえる。また不要になったワイン箱を譲り受け、ソファ下の収納ボックスに。











8.スノーボード&スケートボード界のニューヒーロー・平野歩夢の地元でもある新潟県村上市は、県内でも特に横乗りスポーツが盛ん。その影響を受けて、いつしか娘ふたりもスケートボードに傾倒。あまりの没頭ぶりに、持て余していた自宅の車庫を手作りのスケートパークにアレンジした。休日には友人なども招いて練習をしているそう。　9.横乗り大好きな子供たちは、スケートボードだけではなく、BMXも乗りこなす超アクティブ派。「僕が自転車に乗っていたり、サーフィンとかスケートボードの横乗りの文化が好きだったので、彼女たちがここまでハマっているのは完全に僕の影響が大きいと思います（笑）」。　10.長女がサポートを受けるスケートブランド〈パークデリ〉のデッキ。他にも所縁のあるアーティストの作品が飾られる。　11.クルーザーデッキは娘にもデッキを提供していただいてるブラインダーズのハンドメイドクルーザー。　12.ソファの背面に飾られる作品は左がマーガレット・キルガレン、右がカリフォルニアのアートショップである『オレンジ&パーク』によるもの。　13.家族4人の似顔絵は、人気ラストレーターのIZUMIDA LEE氏の作品。活動初期の頃に新潟でのポップアップイベントで描いてもらった思い入れの深い1枚だ。　14.設計時にはボロボロだったガレージの内装を綺麗に白で塗り、スケートデッキなどを飾れる仕様にしたことで、まるでギャラリーのような雰囲気に。いま以上にたくさんの作品に囲まれた空間になるのが、今から待ち遠しいばかりだ。

04

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

ARMS代表
岩田卓之さん

ARMSディレクター
岩田朋代さん

SPEC

居住地域	：	神奈川県横須賀市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	1LDK＋サービスルーム
居住年数	：	5年
築年数	：	22年

Photo／Chie Kushibiki　Text／Kyoko Oya　取材協力：エンジョイワークス　https://enjoyworks.jp/

フラットにして趣深く。開放的な平屋に映える、ヴィンテージ家具。

都会暮らしの経験がある人なら感じたことがあるかもしれない、利便性と隣り合わせにある息苦しさ。都会の喧騒と忙しなさから少しだけ距離を置き、岩田さん夫妻が選んだのは相模湾に面する南葉山のエリア。約1400㎡もの敷地に建つ平屋建ての一軒家を購入し、フルリノベーション。完成した住まいに息苦しさは微塵もなく、庭に向かって開かれた大きな窓から吹き込む風が心地いい。

「平屋って贅沢じゃないですか。でも、元々は細かく部屋が仕切られた間取り。その仕切りも外壁も天井も解体し、リノベーション前の名残は柱と梁くらいです（笑）。そうして生まれ変わった住まいは横に長い平屋の開放感が際立ち、同時に部屋の表情を決定づけているのが梁だ。

「2000年初頭に建てられた、新しくも古くもない中古物件です。どんな梁が出てくるのか、正直、賭けでもありました」。夫妻の賭けは見事に成功。程よく赤茶けた梁が空間に落ち着きをもたらすとともに、複雑に交差した木材がひとつのデザインとして機能している。岩田さんは梁の印象をさらに際立たせるため、元々の梁に見せ梁をプラス。梁によって部屋のイメージを決定づけるという、なんとも贅沢な手法をとった。

夫妻は梁が彩る平屋の空間に、ヴィンテージの家具をレイアウト。前の住まいから持ち込んだアイテムも多く、「使い込まれては受け継がれていく感じ。ヴィンテージやアンティークって、独特の存在感がありますよね」。現代的なミニマムさとは無縁のヴィンテージが放つ存在感は広々とした部屋にこそ映え、梁がもたらす経年の趣とも美しく調和する。

長く暮らした東京23区から自然豊かな南葉山エリアへと住まいを移した岩田さん夫妻。リノベーションにあたり、夫妻が掲げたコンセプトが"クオリティ・オブ・ライフ"。庭に向けて設けた大きな窓から見える景色と吹き込む風が心地よく、2人の生活を豊かにする。

1.住まいのデザイン性を高めるため、岩田さんは天井の梁にもアレンジをプラス。「デザインのためとは言え、意味のないことをすると嘘っぽさが出てしまうから」と職人の知恵を借りながら躯体を補強するように梁を増設。複雑に交差する木材の印象が、フラットな平屋にリズミカルな表情をもたらしている。　2.梁を見せるべくベッドルームの天井も解体し、掃き出し窓も跳ね上げ式の窓も〈アンダーセン〉からセレクト。両開きの大きな掃き出し窓を開け放すとベッドルームと庭に面したウッドデッキがシームレスにつながり、LDKと同様に開放的。　3.愛犬のヒニーとビッケがくつろぐソファは、朋代さんの母の嫁入り道具とのこと。母から娘へと受け継がれた、味わいもストーリーもあるヴィンテージ家具だ。　4.こちらもベッドルームを写したひとコマ。部屋のアクセントとして効いているカラフルなブランケットは、その多くがUSメイド。岩田さん夫妻はキャンプ好きの一面を持ち、ブランケットはアウトドアでも活躍。　5.「クルマ好きというか、とにかくワーゲンに目がないんです」という卓之さん。さりげなくディスプレイされた“VW1300”のタグもビートルの年式を表し、自身が所有するキャンピングカーもワーゲンバス。　6.シャビーシックな面持ちのグリーンのテーブルを筆頭に、ヴィンテージ家具は中目黒の『ギャラップ』から見つけることが多いそう。ヴィヴィッドな色彩でも落ち着いた印象に映るのは、ヴィンテージだからこそだ。

7.いかにも年季の入ったシューズラックも『ギャラップ』からセレクト。リノベーションによって開放的に生まれ変わった住まいだからこそ、重厚感あるアイアン製のラックも違和感なく映える。　8.代々木公園に面した最高のロケーションでハンバーガーレストラン『アームズ』を営む岩田さん夫妻。料理に一家言ある夫妻らしく、キッチンにもこだわり、カウンターテーブルの天板に用いられているのは床用のタイル。「床用だけに抜群の耐久性。どんな硬いものでも躊躇なくカットでき、料理の幅が広がります」。　9.リビングに設置された跳ね上げ式の窓も〈アンダーセン〉のプロダクト。コストを抑えるため、岩田さん自身がアメリカから個人輸入したとか。　10.リビングのローテーブルももちろん、ヴィンテージ。ちなみにレンガの張られた壁際にセットされているアイロン台とバスケットは、夫妻がキャンプ好きである証。バスケットにギアを詰め込んではキャンピングカーに乗り込み、折り畳み式のアイロン台は野外でのクッキングテーブルになる。　11.「僕らが住み始める以前は、日本庭園だったんです」という広大な庭。造園業を営む友人の手も借りながら緑が生い茂るような庭園をフラットに刈り込み、住まいと同様に開放的なイメージに造り替えている。　12.クルマ好きかつキャンプ好きらしく、トレーラーハウスまで所有。雨漏りを防ぐためのメンテナンスが必要だそうだが、以前は家に招いた友人のゲストルームとして活躍していた。

05

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

ローカルメディアクリエイター
小山太郎さん

SPEC

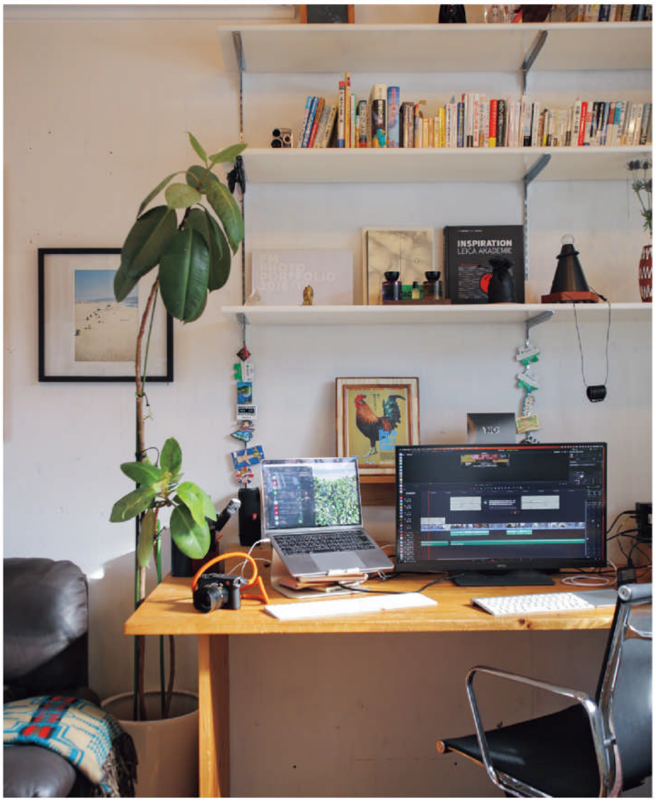
居住地域	：	新潟県新潟市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	3LDK
居住年数	：	10年
築年数	：	約50年

ワークスペースと寛ぎのリビングスペースが好バランスで共存する空間。古い民家だった名残も随所に残しつつ、天井の高さを生かしたインテリアはまるで海外の家のような快適さを感じる。レザーソファと民族柄のラグとの相性も抜群だ!

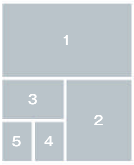
Photo ／ Wataru Shoji（GATAFORNIA） Text ／ Yuho Nomura

ワークスペース＆リビングを兼備した、古民家リノベーションの好例。

サーフショップやデザイン会社勤務を経て、3年前に独立した小山さん。フリーランスになったことで自宅での仕事も増え、ワークスペースとリビングが共存する空間を心掛けたという部屋は、かつて2つあった部屋をひと続きに改築。天井の板も排除し、広々としたスペースを確保した。壁面には生粋のサーファーでもある小山さんにとって欠かせないサーフボードが収納されていたり、サーフトリップで訪れたバイロンベイやベニスビーチの風景を撮影した写真や所縁のあるアーティストの作品が飾られていたりと、まさに小山さんの人となりを表す空間に。「フリーランスだと会社員に比べて自宅にいる時間が長く、いかに快適に過ごせるかが重要だったので、思い切って2つの部屋を1部屋に改築しました。家具ひとつひとつに強いこだわりがあるわけではないんですけど、仕事場とリビングをバランスよく成立させる点においては満足しています。あとはモノもそこまで多くなく、仲間や好きな人たちが手掛けた作品や植物に囲まれているだけで、十分に快適なんですよね」。そんな肩の力が抜けた生活空間には、趣味のサーフィンやカメラなどの目的でたびたび世界各国を旅する小山さんの人柄が滲み出ている。世界を旅する中で無意識のうちに見てきた光景がダイレクトに反映されたことで、どこか異国感のある雰囲気も感じさせてくれており、小山さんの目指す理想の自宅空間は、彼の次の言葉に集約されているのかもしれない。「○○風や○○テイストとかで形容されることもなく、どこの国っぽくもない雰囲気っていうのはベストですね。考えすぎない美学が一番です」。



1.L字型にデザインされたワークデスクは、建築家の友人が製作したお気に入りの一品。窓際に置かれた観葉植物は、いずれも10年近く育っている家族のような存在なのだそう。　2.仕事用のPCは〈ベンキュー〉のモニターとマックのノートパソコンを愛用。デスク前にはガチャ柱を使用した可動式の棚を設置。仕事で使う書籍を置いておくほか、お気に入りの雑貨たちをディスプレイしている。　3.ワークスペース側の本棚近くに飾られた写真は、新潟在住のサーファーやフォトグラファーたちとのコミュニティである『ガタフォルニア』で撮影したサーフシーンを切り取った1枚。その横には、駆け出し時代のリー・イズミダ氏のポスターを。その手前にあるヘルメットは最近父親と共同出資で購入した中型バイクに乗る際に愛用しているモノ。　4.リノベーション時に唯一こだわったという吹き抜けになった壁も、広々とした空間を感じるためのいい工夫に。その手前の三辺の壁に囲まれたスペースにキレイに収まったTVボードもD.I.Y.で製作されており、ナチュラルなウッドで統一したサイドボードとの相性もバッチリ。手前のガラステーブルは、友人から譲り受けた〈イサムノグチ〉のレプリカプロダクト。　5.部屋の目立たない場所にさりげなく飾られた写真は、『ガタフォルニア』を初めて世に広めたきっかけとなったイタリア人フォトグラファーのフィリポが撮影したモノ。小山さんにとっても『ガタフォルニア』のメンバーにとっても思い入れの深い、大切な作品だ。



6.リビングスペースの窓上に壁面収納されたサーフボードは、カリフォルニアを訪れた際に購入したという〈クリステンソン　サーフボード〉のもの。今でも愛用しているお気に入りのボードのひとつ。その下にはカリフォルニアの有名なサーフスポットを記したアートショップの『オレンジ&パーク』によるアートが飾られ、ソファの背面には自身が撮影したバイロンベイでの雄大な海のランドスケープ写真が鎮座。　7.テレビスペースにもアート作品は多数飾られており、東京で開催されたワークショップで出会ったカリグラファーのRYO KOIZUMIによる作品は特にお気に入り。ほかにもアンティーク品のアメリカの国旗なども飾られる。　8.デスクスペースにも大好きな『オレンジ&パーク』によるアートポスターを発見。こちらはカリフォルニアのリゾート地をテーマにした作品。　9.敬愛するクリエイターの高城剛氏が手掛ける〈ネクストラベラーズ ツール〉のオーダーメイドバッグ。旅をこよなく愛する小山さんにとって欠かせない相棒で、購入時は寸法を測るために東京まで訪れるという。旅に特化した機能やギミックなどが魅力とのこと。　10.サーファーにとって欠かすことのできないサーフボードが並んだスペース。普段活躍する機会の多いボードを中心に並べられており、足元には25年前に購入したロングボード用のスケートデッキも。その横の本棚にはサーフィンやアート、旅にまつわる写真集や書籍が置かれている。小山さんの趣味が詰まった空間と言えるだろう。

06

Living With My Favorites 2023

PROFILE

アーティスト
守矢 努さん

SPEC

居住地域	：	東京都世田谷区
居住形態	：	マンション（分譲）
間取り	：	3LDK
居住年数	：	15年
築年数	：	15年

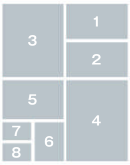
1階なので庭が付き、目の前の大きな公園がこの部屋の決め手となった。「クセがないニュートラルなところが使いやすくて気に入っています。今年、父の故郷である諏訪市に、もうひとつのアトリエとして古民家を手に入れたので、そのインテリアも楽しみです」。

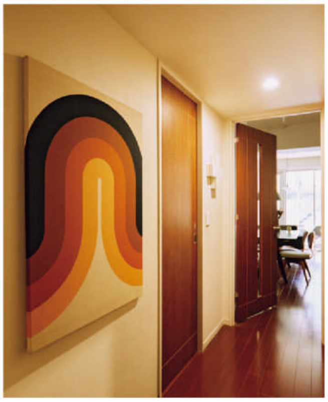
好きなエッセンスを散りばめたリビングと、ストイックに仕上げたアトリエ。

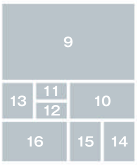
CDジャケットや雑誌を手掛けるアートディレクター／デザイナーを経て、ステンシルアーティストとして活躍し、近年は自身の内面をより忠実にアウトプットできるペインティングのファインアートを制作する守矢さん。「海外のデザインの潮流をいち早く取り入れるのがアートディレクションでしたが、現在制作しているペインティングのアートはアウトドアのニュアンスを作品に込めています。塗料に土を混ぜたり、花鳥風月を感じられる自然界の色を使ったりしながら、抽象画を仕上げているんです」。そう話すスタイルの変遷は、インテリアからも見てとれる。ミッドセンチュリーや北欧のデザイナーズ家具が好きで徐々にミックスされていき、10代で影響を受けたアメリカの音楽やアートに関連したアイテムもちらほらと目に入る。そして随所に自然物である石やドライフラワーなどもディスプレイ。商業デザインから自然を融合したアート作品までを制作する守矢さんらしい部屋が、長い年月を経て完成した。

ここは自宅兼アトリエ。大型の作品以外は、リビングの隣にある作業場で制作していて、ほとんどの時間はそこで過ごしているそうだ。アトリエを覗いてみると、リビングとは対照的な印象。5畳ほどの空間には所狭しと画材や資料が並んでいる。「いろいろとディスプレイしているリビングはイマジネーションを刺激する場所で、作業場はストイックに。広さがちょうどよくて、ここが落ち着きます。本を読むにしても、リビングじゃダラけちゃうから作業場がいい。たまにリビングで過ごすと、別の視点からアイデアが湧いてきます」。

1.リビングに置かれたハイチェストの上は、自然の造形美を感じられるスペースに。収集している石やサンゴや枝、『プレイマウンテン』で購入したオブジェなどが飾られている。奥に並べた守矢さんの作品が、それらとしっくり馴染む。　2.チャールズ・イームズがデザインした、ミッドセンチュリーを代表するひとつ〈ハーマンミラー〉のサイドシェルチェアにロッカーベースを装着。　3.天板が石のセンターテーブルは、中目黒の『ハイク』で購入。ソファに置いているぬいぐるみは、『ナノ・ユニバース』で2000年代初頭から展開していた守矢さんのブランド、〈アイラ ビー ダブ〉のスリーパー。　4.ヴィンテージのシュラフの上には50年代のアメリカのランプや、自分で作った虫の標本を配置。壁には動物や植物から、カート・コバーンやビースティボーイズ、アート作品までを貼って想像力を掻き立てる。　5.今年1月に合同で展覧会を開催した、陶芸家の菊地 亨さんの作品や、天然香木のパロサントをセンターテーブルに置いている。　6.リビングに立てたイーゼルに制作途中の作品を。アトリエからリビングへ移動させ、環境を変えることで新たな発見があるそうだ。リビングとアトリエが対照的なインテリアだからこそ、家の中で気分転換できる。　7.『H.P.デコ』で手に入れたヴィンテージのカップにドライフラワーをセット。カップの味わい深い色合いが際立っている。　8.'50 ～'60年代のライフなど、集めている古い雑誌。アートディレクター時代の片鱗を感じる。







9.こちらが作業場のアトリエ。画材や作品が置かれ、正面には書籍がずらり。現代アートや民俗学など、幅広いジャンルがラインナップする本棚は、守矢さんを形成する大事な要素。「ステンシルのワークショップを開催する時はこれくらいのスペースということもあり、ちょうどいい広さ。大きい作品は、新潟のスタジオやこれから作り込む諏訪市のアトリエで制作しようと思っています」。　10.キャビネットは北欧、隣の小型ラックはアメリカのもので、ともにヴィンテージ。　11.音楽キャンプフェス『ニューアコースティックキャンプ』の立ち上げからアートディレクターとして携わっている守矢さん。そのアウトドアな側面が、資材などを吊り下げているデイジーチェーンから感じられる。　12.制作で使用する画材など。雑多に置いているが、それもサマになっている。　13.文庫本などをまとめているアトリエの一部。レトロな棚も趣を感じる。　14.玄関にもバーナー・パントンのファブリックポットアートを配置。カラーリングがインテリアとマッチして、まとまり感を演出する。　15.『プレイマウンテン』で入手した鏡に据えているのは、ロバート・インディアナによるデザインの〈ハーマンミラー〉のオブジェ。キャッチーなデザインだが、クリア素材のためうまく部屋に馴染んでいる。　16.手前と奥のペンダントライトは、ともに〈ルイスポールセン〉。手前はアルネ・ヤコブセンがデザインしたAJロイヤル、奥は傘が損傷してしまったポール・ヘニングセンがデザインしたPH5。

07

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

専門職
Yさん

SPEC

居住地域 ： 新潟県新潟市
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 3LDK
居住年数 ： 半年
築年数 ： 半年

アメリカンヴィンテージをベースとしながらも、空間ごとにテーマを設け、壁や床のテイストを変えたことで、多面的な魅力を楽しめる住宅に仕上げた。随所にモダンな雰囲気と温もりが感じられ、好きなものを詰め込み、自身のライフスタイルを見事に体現した理想的な住宅だ。

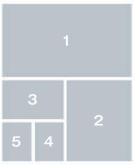
Photo ／ Wataru Shoji（GATAFORNIA） Text ／ Yuho Nomura

細部にまでこだわりを感じる、温もりのあるアメリカンヴィンテージな空間。

以前住んでいた5LDKの住宅から3LDKの現在の住宅へ引っ越してきたYさん一家。そのタイミングで自宅のインテリアも北欧モダンなテイストから古き良きアメリカンライクな雰囲気をベースとした内装へアップデートした。施工を依頼したのは、前回の住宅と同じ、絶大な信頼を置く「ドワーフ」。新潟市内でアメリカンな住宅を数多く手掛ける人気工務店だ。何度も緻密な話し合いを設けて実現した住宅は、Yさんの住まいへのこだわりと多趣味なライフスタイルがこれでもかと詰まっている。

「以前住んでいた自宅が白壁を基調とした北欧テイストだったのですが、引っ越しを機に住宅のインテリアも居心地が良く、温かみのあるアメリカンヴィンテージをテーマに置いた空間を心掛けて設計しました。具体的には、空間ごとに異なるテーマを設けて、適した素材や内装仕上げ、家具や照明などを厳選し、細部まで妥協なくスタイルを貫いているのがポイントです。また趣味のスキーや家族でBBQ・キャンプをすることもあるので、そうしたライフスタイルを包括できるような空間にもしていきたいなと思い、こだわりを持ってイチから作り上げました」。その言葉どおり、ひと言では括れないさまざまなテイストが混在したYさんの自宅は、まるで海外のデザイナーズホテルのような空間が広がる。壁や床の素材もあえて統一させず、空間ごとに切り替えているため、多様なテイストを楽しめるのも大きな魅力だ。特にキッチンスペースは、アメリカンダイナーの内装やインテリアから着想を得たという、思い入れの強いスペースなのだそう。

1.〈アクメ ファニチャー〉のTV ボードやシングルソファを主軸としたリビング家具の主役は、なんと言ってもメインのレザーソファ。発色の良いブラウンカラーで、通称ロンバケソファと呼ばれる〈ファイブ・バイ・ファイブ〉によるもの。ヴィンテージの大判ラグとの相性も抜群だ。さらに窓際越しには玄関への通路とウッドデッキが望め、開放的な雰囲気も満喫できるのがポイントだ。　2.存在感あふれる観葉植物が出迎える玄関も、すっきりとしたスタイリッシュな空間に。チベットの由緒正しきチベタンタイガーラグは玄関マットとして活躍。　3.ステンレスとウッドのコンビネーションが美しい、温かみのあるキッチンスペース。採光が綺麗なアンダーセンの木製窓がセンス良く配置され、壁はモルタルとヨーロピアンな雰囲気が漂うレトロなタイル貼りのデザインが目を引く。　4.エントランスの壁に飾られているのは、イギリスでレタープレススタジオを主催するステファン・ケニーによる活版印刷によるアートポスター。インテリアの雰囲気とも絶妙にマッチ。　5.こちらも特注の設計でこだわったという玄関の手洗いコーナー。アメリカのダイナーやホテルを彷彿とさせるステンレス製のペーパーホルダーや希少な真鍮製の蛇口、そしてアメリカンメイドの琺瑯を使用した洗面ボウルもお気に入り。モダンな印象を与えてくれるクラシカルなグリーンタイルや、洗練されたウッド枠の鏡など、随所に抜かりのない意匠を感じる空間だ。



6.リビングから2階へと通じる階段の踊り場に飾られた、ステンシルアーティスト守矢努氏のアブストラクトなアートピース。親交のある守矢さんが新居のために制作してくれたという完全オーダーメイドの作品だ。　7.イギリスのネイサン社によるヴィンテージのサイドボード。　8.キッチンスペースに設けたカウンターテーブル。デザインの異なるヴィンテージ風のスツールをセッティングし、さならがナイトバーのような雰囲気をイメージ。　9.以前の住宅から使っているという愛着満載のデンマーク製のダイニングテーブルと椅子のセット。ルイス・ポールセンのペンダントライトとも好相性で、それぞれヴィンテージ品とは思えないほど状態も良好。ヘリンボーンの床や奥の壁色などが、海外の住宅を彷彿とさせる空間に。　10.2階には木製のピアノが設置されたスペースも。色とりどりのドアとストライプ状の白壁のデザインが洗練された雰囲気を醸し出している。　11.たくさんの本やレコードに囲まれた書斎的スペース。Yさんの趣味が詰まったお部屋で、休日の読書や音楽鑑賞などを嗜む際に最適な憩いの空間だ。　12.夏や晴れた日には家族や友人たちとBBQも楽しめるウッドテラス。アウトドア用のL字ソファやウッドで統一したテーブル類が、リラックスできるムードを高めてくれる。　13.趣味のキャンプや釣り、自転車などの四季を楽しむギア類を収納する倉庫。壁全体を有孔ボードに改装し、収納性を高めているのがポイントなのだそう。

08

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

Purveyorsオーナー
小林宏明さん

SPEC

居住地域	：	群馬県桐生市
居住形態	：	マンション（賃貸）
間取り	：	2LDK＋ロフト＋サンルーム
居住年数	：	3年
築年数	：	不明

借りた2つの部屋がアシンメトリーの間取りになっているマンション。普段過ごしているこちらの空間は、小林さんのお気に入りというアートや作品に囲まれる。「家具は資産と同じなので」と話すように、ファニチャー類はどれも貴重なデザイナーズのオリジナルばかり。

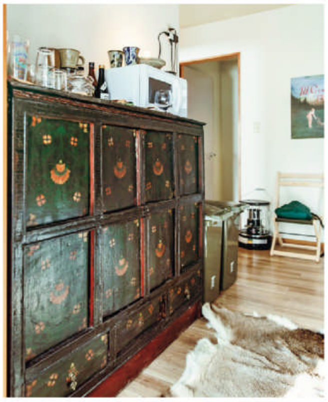
Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ GO OUT　取材協力：Purveyors　https://linktr.ee/Purveyors

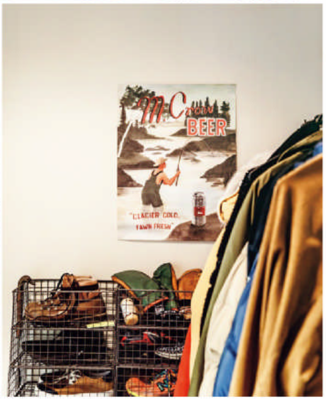
インスピレーションを刺激する、緑のカーテンに囲まれたアシンメトリーな部屋。

群馬県桐生市のアウトドアセレクトショップ『パーヴェイヤーズ』。本格的なアウトドアギアはもちろん、世界各国から集められたユニークなアイテムやデザイン性に富んだギアが揃うと、全国にファンを抱える。そんな話題の店舗を手掛ける小林さんの住まいもひと味違う。「マンション2階の2部屋が空いていたので、どちらも借りました。非対称な間取りがおもしろくて。店舗のポップアップで毎週全国から人が来るので、もうひとつはゲストハウスです」。東京・青山を拠点にしていた小林さんだが、ショップオープンに伴い拠点を増やした。「自宅を探すにあたり、店からも近くて山を感じられる場所がよかったんです。ここは山と街に挟まれているのがいい」。

一番のお気に入りという奥に位置する空間は、どちらの部屋にもカーテンはあえて付けていない。「せっかく見えている緑を隠すなんてもったいない。カーテン代わりですね」。プライベートでも釣り・山・キャンプと、根っからのアウトドア人である小林さんだが、自宅の中はまるでギャラリーかのようにアート作品やプロダクトが数多く並ぶ。「人生でもっとも影響を受けているアーティストがタイラー・ヘイズ。彼のポスターや写真集はどちらの家にも置いてあるので、ときどきお気に入りの部屋に行ってインスピレーションを受けています」。

仕事だけに留まらず自宅でも刺激を受ける日々。そんな中で生まれた発想のおかげか、昨年は那須に新店舗を、そして今年4月にキャンプ場もオープン予定。部屋にちりばめられた数々の作品は、まるで小林さんの人生の履歴を見ているかのようだ。





1.自宅スペースの書斎。〈イデー〉のデスクに合わせたマルセル・ブロイヤーも当時モノ。ロフトに繋がる梯子には、キャップや帽子類がいつでも取り出せるようにセッティング。　2.キッチン収納に使われていたのは、蓮の花の絵が描かれた100年前のチベタン家具。ネパールを訪れた際に購入した貴重なものだ。　3.玄関入ってすぐはアウターとシューズ置き場。「クローゼットだと湿気が籠るため、アウターは1年中ここに置いています」。靴を重ねたワイヤーボックスは〈プエブコ〉のもの。 4.ヴィンテージのテレビボードの上には、アンドレアス・グルスキーの写真集や〈稲熊家具製作所〉のランプなど、「本当のいいものを」という小林さんらしいセレクトが光る。　5.オランダ製のストリングシェルフに置かれたのは、お気に入りという作家の作品たち。ホアン・コルネラのフィギュアやナカオテッペイのスシLA、中園義光の花器などジャンルレスにセレクトされている。　6.小林さんがもっとも尊敬するアーティスト、タイラー・ヘイズが手掛けたショップのポスター。彼のルーツを探すためアメリカ・ロスティンにあるアトリエにも訪れたことがあるそう。　7.リビングの窓際に置かれた〈マウンテンリサーチ〉の親子鳥と呼ばれている鳥小屋のモチーフ。普段はイラストだが、立体作品は世の中に数体しかないものをデザイナーの小林氏から譲り受けた。　8.デスクの上に置かれたミニカーは、小林さんの愛車、〈三菱〉のジープだ。

9.こちらはゲストルームに使っている空間。ダイニングスペースには、〈トラックファニチャー〉のテーブルが存在感を放つ。上に置かれた山のオブジェは、実はそれっぽい形の岩だそう。名古屋にある『コンパス』というショップで見つけたユニークな作品だ。　**10.**リビングのテーブル上にはタイラー・ヘイズの写真集などが置かれ、いつでも彼の作品から刺激を受けられるようになっている。　**11.**この部屋が小林さん一番のお気に入りというだけあり、窓の外を覗くとまるで山の中にいるかのようなグリーンに囲まれた空間が広がる。ソファは〈ゼロファーストデザイン〉の"トライベッカ"というモデル。絶妙な色のテキスタイルが珍しいとお気に入り。　**12.**アウトドアラバーの小林さんは、冬の間に1ヵ月は山に籠り、スノーサーフィンを楽しむ。板は安定の〈ゲンテンスティック〉をチョイス。　**13.**ショップでも取り扱いがある民芸品だが、小林さんの自宅にもさまざまな国のものが置かれている。玄関に飾られたお面はブラジルの原住民が祭りで使うものだ。壁に掛けられた民芸品も、上は『エッセンシャルストア』で、下は『スイムスーツ・デパートメント』で見つけたもの。　**14.**窓際に置かれた作品は、陶芸家キム・ホノの作品集や名古屋の『バスハウス』で見つけた作品など、旅先で出会った小林さんの琴線に触れるアイテムが並ぶ。　**15.**プライベート空間と同じストリングシェルフに、お気に入り作品をディスプレイ。

09

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

会社員
健太さん
文子さん

SPEC

居住地域	：	茨城県つくば市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	4LDK＋納屋
居住年数	：	約9ヵ月
築年数	：	約45年

後から取り付けてもらったという薪ストーブは、ドイツの〈レダ〉というメーカーのアンデルセンストーブ。かつては縁側だった空間とひと続きになった広いリビングダイニングのスペースも、これ1台で十分暖かい。寒さに弱い小型犬もこれで安心して冬が越せる。

Photo ／ Kiharu Karube　Text ／ GO OUT

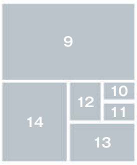
愛犬と共にのびのび暮らす、平家と納屋とソト遊びのイイ関係。

キャンプができてしまうほどの大きな庭に、大型のクルマ2台がスッポリと収まる大きな納屋。そんな充実した環境が揃う中で、愛犬3匹と共にのびのびと暮らす健太さん、文子さん夫婦。「私が実家暮らしの時から犬を飼っていたので、結婚後も犬のいる生活が理想でした」。そう話す文子さんがきっかけで、5年前に夫婦に引き取られたのが保護犬のむぎ(♀)だ。そこから同じく保護犬のぐら(♀)を迎え、犬のいる暮らしがスタート。5年ほど前から始めたというキャンプも、愛犬たちが楽しそうに過ごせる環境だった、というのが大きな理由。広い空間でのびのび過ごす2匹を見ているうちに、走り回れるほど広い庭のある家に引っ越したいという思いが募っていたそう。

そこで偶然見つけたのが、この古民家物件だ。「ここがいい、という加算方式ではなく、減点されるポイントがなかったんです」。こちらは古民家専門でリノベーションを行う会社が手掛けたもので、古風な外観に相反して、室内は現代風なデザインが特徴的。そんな雰囲気も気に入った理由のひとつ。「でも一番の決め手は庭の広さと納屋。家の向かいに納屋があり、どこからでも犬が走り回っている様子を見える配置です」。

夫婦の趣味であるキャンプの道具を使い、友人らを呼んでBBQを楽しむことも増え、わざわざ外に出ずとも外遊びがより身近になった。「庭にピザ窯を作ったほかに、冬は薪ストーブで暖を取るので焚き火気分が味わえます」。さらにうれしいのは、この家に引っ越したことでそら(♂)を半年前に迎えたことだろう。愛犬ファーストで選んだ空間は、いつの間にか夫婦にとっても最高の環境へと進化していったようだ。

1.ストーブ近くに置かれたパーソナルチェアは、〈ニールセン〉のオットマン付き。青山のセレクトショップが偶然近所でアウトレットセールを開催していた際に見つけた。ここでくつろぎながら庭を眺めるのが至福の時間。　2.玄関脇に備え付けで設置されていたラック。外出時に使うキャップや愛犬の散歩用アイテムなど、すぐに取り出したいモノを並べている。玄関からも見えるため、ディスプレイとしての役割も。　3.玄関部分は以前のデザインを踏襲した古風な作り。備え付けのシューズボックスの上部には、前に付いていた欄間を流用した照明が付けられており、これもお気に入りだそう。　4.リビングの柱裏は、ガチャ柱のパーツを使った可動式のオープンラック。思い出の写真やお気に入りの雑誌、流木などを飾る趣味スペース。　5.玄関隣に作った健太さん自作のピザ釜。友人を呼び自宅で集まることが多いため、温かい時期は庭にアウトドアリビングを展開することが多い。「ホームセンターで買ったレンガを使って組み上げただけですが、大活躍です」。　6.納屋はシャッター付きの小屋が付き、キャンプギア一式を収納している。登場頻度の高いアイテムは、〈ユニフレーム〉のフィールドラックに載せてフリースペースに配置。　7.常に消費する薪は、雨風を凌げる納屋が定位置。取材後には大型の薪ラックも入手したそうで、大量にストックできるように。　8.駐車場として使うこともあるが、人が集まると屋根付きの快適なリビングに変身。



9.オープンシェルフ付きのキッチンも、この家を購入する決め手となったお気に入りポイント。キャンプや自宅でもコーヒーを飲む機会が多く、〈カリタ〉のミルや愛犬と同じトイプードルがモチーフになった清澄白河の『ザクリームオブザクロップコーヒー』のドリッパー、〈ネスプレッソ〉のコーヒーマシンが活躍する。　10.ソファ横のグリーンに立てかけられたポスターは、結婚式を挙げたハワイの式場が地図になっているポスター。その日は愛犬の誕生日でもあり、2人にとって大事な1日だ。文子さんから健太さんへのプレゼント。　11.リビングと廊下を挟んで反対にある部屋は、健太さんの趣味スペース。元々音楽好きだったこともあり、DJを趣味としてスタートさせた。『イケア』で購入したオープンラックに〈パイオニア〉のミキサーと〈テクニクス〉のターンテーブルを設置した。　12.キッチン下にはむぎとぐら専用のソファが。広い戸建てを手に入れてからは愛犬たちもより快適に自宅内で過ごしているそう。　13.『イケア』で購入したソファベッドは、家族全員でくつろげるゆとりサイズに、専用のステップまで完備。〈ペンドルトン〉と〈オレゴニアンキャンパー〉のブランケットを敷き、愛犬たちはここで寝ていることが多い。　14.テレビボードと大きめのダイニングテーブルは、リノベーションを手掛けた会社のオリジナルアイテム。チェアは近所のアウトレットで入手したデザイナーズもので、座り心地で選んだ。

10

Living With My Favorites 2023

PROFILE

REPAIR代表取締役
渡會竜也さん

SPEC

居住地域	：	神奈川県藤沢市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	4SLDK
居住年数	：	10年
築年数	：	29年

高い吹き抜けのあるリビングには、この家の雰囲気に合わせて渡會さんがすべて自作したウッド製ファニチャーが並ぶ。後ろに見える鳥かごは、フランス旅行の際に見つけたモロッコ製のものだそうで、意識せずともウッディな温もりが溢れた空間に仕上がっていた。

20年ほど前に購入したという〈イデー〉のソファが存在感を放つ。カフェテーブルももちろん自作したのもので、ソファに合わせたブラックの天板が空間に統一感を生み出している。

開放感溢れた空間に、さりげなく家主の趣味が見え隠れ。

海の街として印象の強い藤沢市。そんな地域でも畑など緑に多く囲まれた場所に住む渡會さん一家。「この家に住む前までは三宿や三軒茶屋など都心暮らしでした。ボクは昔からキャンプとかアウトドア好き。奥さんも田舎暮らしを希望していたので、子供の成長に合わせ富士山が見えるこの土地に家を購入しました」。

また夫婦揃ってアパレル出身ということもあり、趣味が合うという。「ボクは前に経験のあった建築系の仕事に戻り、奥さんは近所の農家を手伝っています。でもファッション感覚で物を選ぶ趣味は変わりません。家具もデザイナーズのものを集めたりアートが好きだったり。今は子供もいるので会社の事務所に置いていますが」。そう話すとおり、ダイニングチェアはすべてデザイナーズでさり気なく揃えられ、壁の時計もジョージ・ネルソンだ。

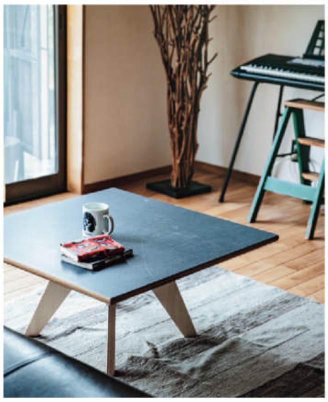
そして生活の場に趣味が反映されているように、渡會さんの仕事には家族の趣味が生きている。「子たちの趣味であるスケボーやバスケなどに関することは、実は会社でも事業を展開しています。自分の趣味であるキャンプは『キャンプブック』というフェス事業で生きていますね。ほかにも会社で手掛けている内容はさまざまですが、気づいたら好きなことや趣味が仕事になっていました」。

生活と切っても切り離せないのが仕事、そして日々を過ごす自宅だ。渡會さんはそのどちらにも自分の好きを生かし、暮らしを充実させてきた。そんな家主の趣味が見え隠れする空間は、自身はもちろん家族にとっても最高のプライベート空間になっているに違いない。

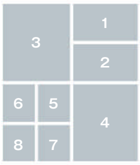
ダイニングにさり気なく飾られていたのは、アンディ・ウォーホルの最後の晩餐 カモフラージュ。ほかアンリ・マティスの絵なども飾られ、渡會さんのアート好きが伝わる。

リビングに飾られたドライフラワーは、毎年の結婚記念日に渡會さんが奥さんへプレゼントしたものだそう。壁にかけたり花器に入れたりと、すべてディスプレイとして保管。

玄関入ってすぐ目に入るグリーンのベンチ。これは息子2人と作った物だ。「ベンチだけ端材で作り自由にペイントさせました。かっこよく仕上がったのでここに置いています」。



1.2階の子供部屋に繋がる廊下は、子供の遊び場にしたフリースペースが。リビングの吹き抜けに繋がるガラス窓下はベンチになっており、下は収納スペースとして機能。　2.特徴的なデザインになっている階段の丸窓。外から見た際も、玄関上にあるこの窓がアクセントになっていた。下に付けられたマリンランプなど、ひと癖あるライトにも注目。　3.渡會さんの自宅はリフォーム物件。「時間がない中での作業だったので、実はあまりこだわりはないんです（笑）」と話すが、モザイクタイルが貼られたキッチンなど、ディテールひとつひとつがおしゃれな仕上がり。　4.ダイニングのテーブルももちろん自作。チェアはジャン・プルーヴェとアルネ・ヤコブセンのもの。5.吹き抜けから下がったランプのシェードには、ヴィンテージ家具などを取り扱う『シャークアタック』で購入したものをチョイス。ダイニングに吊るされたウッド素材のランプシェードも同じショップで購入。　6.リビングに置かれたループランプは、実は『イケア』で購入したものの脚に、流木を付けてアレンジしている。ちょっとした工夫でよりインテリアもおしゃれに。　7.ダイニングの出窓には、夫婦で集めている多肉などのグリーンがズラリと並ぶ。ホームセンターなど、出掛けに見つけたお気に入りだ。8.渡會さんの会社で手がけるオリジナルブランド『シークエンスファニチャーサプライ』でも家具を手がけているため、自作ファニチャーはまさにプロ級の仕上がり。



テレビボードやその隣に置かれた棚などはスギの足場いたとフラットバーという金具を使い作ったもの。ミッドセンチュリーの特徴であるFRP素材や工業用製品といったものが好み。

ウッドデッキももちろんD.I.Y.によるもの。「テーブルはエンツォ・マーリ、イスは芦沢啓治氏など、自作のものは好きな建築家やデザイナーの作品から刺激を受けてデザインしています」。

11

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

美容師
木村太一さん

SPEC

居住地域　：　大阪府大阪市
居住形態　：　マンション（分譲）
間取り　　：　2LDK
居住年数　：　6年
築年数　　：　44年

中古物件を中心に住まい探しをするも「住みたいと思える家がない」。そこで木村さんが選んだのがリノベーション。施工は『リノベる。』に依頼し、かつての3LDKを2LDKに改装。広々と生まれ変わったLDKに張られたラワン合板の壁が、部屋の開放感を際立たせている。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya　取材協力：リノベる。　https://www.renoveru.jp/

異素材が隣り合い、アートとキャンプが溶け合う。家主の趣味をミクスチャーに。

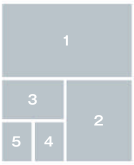
多くの人にとって、アートの好みは感覚。どこに惹かれたのか具体的に説明するのは簡単ではなく、理由もなく心揺さぶられるのがアートのはずだ。それだけにビビッと来た作品と住まいのインテリアがマッチするとは限らず、購入を躊躇してしまうこともしばしば。しかし、木村さんは「ここに引っ越して以来、アートの飾り場所には困りません」と話す。

その理由がリノベーションによって実現させたラワン合板の壁だ。LDKを貫くように張られたウッドの壁が部屋の奥行きを深く見せつつ、お気に入りの写真集をディスプレイするためのウォールラックも備えている。木製の壁ゆえに作品を飾るためのピンを打つにも躊躇は不要。広々とした壁にはクラシックアートもポップアートも違和感なく映え、「この壁にどうアートを配置しようか、考える時間が楽しいんです」。

そして、アートが彩る空間にさりげなく、そこかしこに顔を出すのが家主のキャンプ好きを浮き彫りにするギアの数々。コンクリートが剥き出しの天井からはランタンが吊され、リビングにレイアウトされたチェアやローテーブルもキャンプ用だ。ウッドとコンクリートが織りなすミクスチャーの空間にアートとキャンプの要素が見事に溶け合っている が、実は木村さんは近い将来、自身のガレージブランドをローンチ予定。

「自分が手掛けるブランドに関しても、ミクスチャーの感覚があります。アウトドアでもインドアでも便利に、どちらにも映えるギアを作りたくて」。住まいにも表れたミクスチャーのセンスがギアにどう反映されるのか、ローンチが待ち遠しい。

1.太陽の塔のオブジェやLEDランタンが置かれているミニテーブルは、実はキャンプギア。〈ワンダラウト〉のユニバーサルスタンドに〈38エクスプロー〉の38パレットをセット。木村さんの住まいでは、アウトドアの道具が暮らしの一部として溶け込んでいる。　2.アイアンとウッドの異素材を組み合わせた植物用のラックもキャンプ用品。キャンプを始めたばかりの頃に購入し、現在では自宅で活躍。鉢植えも花器も作家性の高いアイテムがセレクトされ、「実は子供の玩具なんです」という恐竜やサイのフィギュアさえも、どこかアートの面持ちに。　3.住まいのリノベーションを手掛けた『リノべる。』による造作というダイニングテーブルには〈カリモクニュースタンダード〉のキャストールチェアをコーディネート。　4.アートに目がない木村さん。最近、お気に入りのアーティストは関西を拠点に活動するカリー氏。柔らかくも色彩豊かなペイントも、その隣のフラワーオブジェもカリー氏の作品だ。ウッドの壁には、モノクロのアートも色鮮やかなアートも映える。　5.コンクリート打ちっぱなしの天井とのメリハリはもちろん、アートをディスプレイすることを前提にウッドの壁をチョイス。木製ならピンを打つのも容易とあって、大ぶりのアートを飾るのも何のその。ちなみにテレビの上に飾られているハンティングトロフィーは、服飾を手掛ける〈ヘルス〉のプロダクト。フェルトとレザーで作られた、柔和なシルエットがユニークだ。



6.リビングからダイニングまで、大胆に張られたラワン合板の壁。味のあるウッドのブラウンに〈アナルコマウンテニアーズ〉による鮮やかなブルーのタペストリーが映え、その隣はジェリー鵜飼氏のキャンバスプリントとカリー氏による風刺の利いた1枚。　7.キッチンはペニンシュラスタイル。壁はコンクリートの躯体を剥き出しに、カウンターはウッド素材。この異素材ミックスが木村さんらしさだ。　8.部屋全体にウッドとコンクリートの異素材が溶け合い、木を多用しながらも都会的なムード。「写真集が好きなんです」という木村さんはラワン合板の壁に造作のラックをオーダー。背差しの必要なく、写真集の"顔"たる表紙をじっくり眺められる。ちなみにダイニングにセットされた照明は『ウニコ』からセレクト。リビングにはイサム・ノグチのアカリから球体のモデルを選び、照明のシルエットも三角と丸のミクスチャーに。9.天井からハンギングされたフュアハンドランタンは単なる飾りでなく、キャンプにも持ち出すそう。部屋ではインテリアとして活躍し、アウトドアでは本来の役割を果たす。　10.リノベーションによって玄関スペースを拡張。ギアの多くはシューズラックの下に収納し、キャンプに出掛けるにも持ち出しやすく。　11.木村さんがローンチ予定のガレージブランドの名前は〈ザ・コア・オブ・シングス〉。ランタンスタンドもセットでき、アウトドアでもインドアでも便利なテーブルはブランドの試作モデルだ。

12

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

マクラメ作家
小野正史さん

SPEC

居住地域 ： 東京都東大和市
居住形態 ： マンション（賃貸）
間取り ： 2DK
居住年数 ： 10年
築年数 ： 10年

当初はデスクで作業することを想定していた制作スペースだが、雑貨やグリーンが増え続けた結果、デスクは飾り棚と化した。グリーン選びの基準は、個性的な形をしていること。横浜の『ザ・バルブブック』で購入することが多いそう。

伝統工芸×マクラメの化学反応。異文化ミックスの住まい。

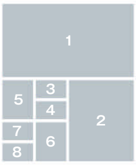
紐に結び目を作り模様を表現していくマクラメ。古代中東が起源といわれる技法に、日本の伝統文化を取り入れ、新たな解釈から作品を生み出しているのが小野さんだ。制作のほとんどは自宅で行っているという。

そんな自宅兼アトリエは白基調の躯体にナチュラルな家具、多国籍な雑貨や陶器、バランスのいいグリーンが映えているのが印象的。インテリアのイメージソースにしているのは、イームズハウスなのだとか。「昔から日本の民芸品に興味があって、人形や壺を集めていました。そこにイームズハウスの雰囲気を取り入れ始めたのが6年前くらい。できるだけ原色のモノは控えて、置物たちが目立つように意識しています」。気分や感覚任せというレイアウトのミックス感も素敵だ。さらに部屋には人形や壺以外にも、目を引くコレクションが多数。参考資料にしている藁編みの農耕具や、同時期に活動を始めたアーティストの作品など、作家としての活動を通して集まってきたアイテムも多いようだ。

マクラメ自体をインテリアに取り入れているのも、特筆すべき点のひとつ。ペンダントライトのコード部分を装飾したり、グリーンの吊るしとしても使用したりと、紐に天然素材が用いられているからか、不思議とインテリアにノイズを与えていない。雰囲気を崩すことなく、しっかりとマクラメ特有の個性的なデザインが存在感を放つバランスのよさだ。

伝統ある品々とマクラメが溶け合ったミクスチャーな空間。その組み合わせは、日本やアイヌの文化を吸収して進化する、小野さんの作品そのものを写し出すかのようだ。

1.ダイニング横には知り合いの古民家カフェから譲り受けたシェルフ。昭和感ある見た目が気に入っているそう。棚上に飾られているのはヨセミテの写真。　2.白壁の殺風景さをウッドの衝立と壁面のアートを使い、ナチュラルに緩和している。「衝立はハンギングでマクラメづくりをする際にも活躍しています」。　3.リビングソファ横にも顔を出す壺たち。部屋の余白を埋めるかのように配置されている。　4.制作部屋のデスク下はマクラメ用の素材をまとめている。シンプルなかごも持ち手をマクラメで装飾すれば、個性的な印象にアップデート。　5.気根を伸ばしたモンステラのように独特な形状のグリーンが好みだそう。台座もウッド素材で統一して、鉢との間にはマクラメを噛ませ、滑り止め的に使用している。　6.壺にハマったのは日本民藝館に展示されていた小鹿田焼に魅せられたのがきっかけ。さまざまな形状と大きさのものが部屋のそこかしこに並べられている。　7.スマホの誤操作で意図せず購入した丸太は、人形棚にぴったりだった。天面にはメキシコ・オアハカ州のアレブリヘスと日本の張り子、足元には北海道の木彫りクマと出自の異なる民芸品たちがミックスされ鎮座している。牛柄のカーペットを挟み込んで床面もケア。
8.試験管を差し込んでフラワーベースとして使おうとしていた木片。「懇意にしているアーティスト、トクナガケイイチロウ氏にペインティングを施してもらいました」。



9.ソファの上にディスプレイされているのは、マクラメの参考資料として集めたという昔の藁編みの農具。福井県の背負子や用途不明の網など、インスピレーションを得られるアイテムを暮らしの中心に。　10.玄関のみの1階から続く階段にも民芸品をレイアウト。壺の台として使用しているのは〈天童木工〉のバタフライスツール。マクラメのつながりで手に入れた鯨の背骨も一緒に飾っている。　11.小野さん宅に入ると、まず目に飛び込んでくる“縁起物スペース”。大吉の“吉”が描かれた絣の半纏を筆頭に、“亀”と“鶴”の字が描かれた出雲大社の凧、日本語訳すると“笑う門には福来たる”を意味する〈ナイン　レタープレス〉のポスターというラインナップで運気が上がること間違いなし。　12. ワークショップで余ったという、シェラカップ鉢のグリーン。マクラメで吊るすのにちょうどいいサイズ感なんだとか。　13.廊下には「家の中で唯一のポップなアートかも」という〈ピーナッツ〉のポスター。トレーディングカードを裁断する前の貴重なヴィンテージアイテム。　14.制作スペース奥には〈天童木工〉のオフィスロッカーで収納性を確保。　15.ダイニングで抜群な存在感を放つポスターは、同時期にアーティスト活動を始めたという新城　大地郎氏の作品。テーブル上には時間がある時に読めるようにと本を“積ん読”。　16.マクラメが用いられたハンギンググリーン。紐に結び目があることで、シンプルすぎない印象を演出。

13

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

バンキャンプコーディネーター
ヘンミ マオさん

SPEC

居住地域　：　埼玉県秩父郡
居住形態　：　一戸建て（持ち家）
間取り　　：　1LDK＋サンルーム
居住年数　：　1年
築年数　　：　約40年

木の壁を生かしたログハウスの趣を残しつつ、インテリアのテーマは“インダストリアル”。「特有の無骨さによって、ちょっとした粗も気になりません（笑）」。ヘンミさんの住まいは実は2階建て。“成せば成る”の精神をモットーに、セルフリノベーションを継続中だ。

「中古のバンを改装してからは、キャンプはもっぱら車中泊。ここには不要になったテントを張っています」。居住空間に負けない広さを誇り、優に10人以上を招くことができる。

何事も Do It Yourself ！　キャンプの醍醐味を伝える、エバンジェリストの家。

ヘンミさんが暮らすのは、かつて税理士事務所として100人ものスタッフを収容していた物件。祖父が買い取った物件を一棟そのまま譲り受け、床に板を張り、天井を塗り替え、贅沢なまでに広々とした空間をセルフリノベーション。プロの手を借りることはせず、D.I.Y.を貫いた。

「住宅に関しては完全なる素人です。素人が内装をD.I.Y.するなんて、無謀な話ですよね(笑)。でも、何事も成せば成る。試行錯誤を重ねながら満足のいく空間を手作りしていく楽しさは、キャンプにも通じます」。リビングのそこかしこに顔を出すランタンやストーブの存在が物語るように、ヘンミさんは筋金入りのキャンプ好きだ。中古のバンを車中泊が可能な仕様にD.I.Y.したのをきっかけに勤めていた会社を辞め、現在はバンキャンプのコーディネーターとして活動している。

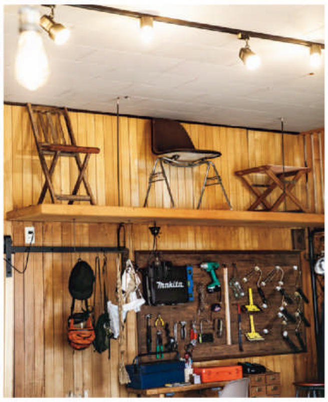
「大自然を謳歌するべく〝自分で何とかする〟のがキャンプの醍醐味。サイトの設営も家づくりも、僕にとっては同じ感覚なんです」。キャンプの醍醐味を伝えることこそ、コーディネーターの役割。仕事への情熱は住まいにも存分に表れ、ヘンミさんはベランダに面したサンルームに屋内キャンプ場までD.I.Y.。

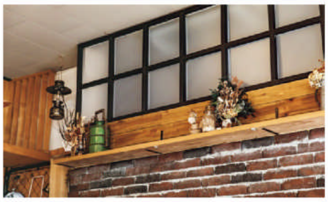
居住空間に負けず劣らず広々としたサンルームには複数のテントが張られ、まさにキャンプ場の面持ち。〝自分で何とかする醍醐味〟を味わってもらうために湯を沸かすにも備え付けのコンロは使わず、あくまでもキャンプ用のバーナーを用いる。ヘンミさんはアウトドアの非日常的な楽しさを伝えるべく友人を招いては もてなし、その魅力を伝えている。

ヘンミさんの住まいはベランダまで広々。タープの下でBBQを楽しむのはもちろん、ベランダにもテントを張り、野外の気分を楽しみたい友人はこちらにアテンドするとか。

D.I.Y.のキャンプ場により多くの友人を招くため、ヘンミさんはテントを張るスペースを2階建てにしようと奮闘中。角材を箱形に組み、仕上げに強度をアップさせれば完成だ。

「日常生活にはない、ちょっとした不便。この不便を楽しむのもキャンプの魅力」。火を使うにもキャンプの作法に倣い、〈プリムス〉のツーバーナーに燃料もしっかり完備。





1.約50畳のワンフロアに、ウォークインクローゼットにベッドルームまでD.I.Y.。「角材を箱形に組んで自作した躯体に壁を張り、部屋を仕切っています。広いスペースの一角に小屋を設置し、小屋をクローゼットと寝室にしているイメージです」。 2.レンガの壁の裏側がD.I.Y.のウォークインクローゼットとベッドルームという間取り。ちなみに壁際に置かれたストーブは、キャンパーにおなじみの〈日本船燈〉。ヘンミさんは親子揃ってユーズドの趣を好み、こちらのストーブは父親から受け継いだそう。 3.クローゼットの壁は強度の高さとコストパフォーマンスを兼ね備えたOSB合板。壁際にはリンゴ箱をはじめとする木箱を重ね、ラックとして活用している。 4.レンガの壁の上部には自作の格子窓を設置。「角材で格子を組み、100円ショップで購入した組み立てラックのパネルをはめ込んでいます」。 5.ラックに飾られている人形は、父親から受け継いだという1950年代ヴィンテージの"バディー・リー"。その隣に見える〈リー〉のネオンサインは不要品の譲り受けができる『ジモティー』から掘り出したとか。 6.「税理士事務所の神棚だったようです」というスペースにはお気に入りのチェアをディスプレイ。 7.天井にハンガーパイプを取り付け、ユーズドのTシャツや〈L.L.ビーン〉のトートバッグをハンギング。 8.D.I.Y.道具の"見せる収納"もヘンミさんの自作。窓枠からガラスを取り外し、有孔ボードをセットしている。

9. 「キャンパーって、手間ひまを掛けるのが好きですよね(笑)。キャンプ仲間の協力も得ながら完成させました」。ちなみに元々の床は土足仕様のコンクリート敷き。そこに板材を張り、インダストリアルのテイストをプラスするべく、天井はグレーのペンキで塗装している。　**10.** ベッドフレームは『イケア』のプロダクトだそうだが、大ぶりのスタンドライトをはじめとする家具の多くを『ジモティー』から入手。ヘンミさんはアウトドア用品を取り扱うリユースショップの店長を務めていたとあって、ユーズドの目利きはお手の物だ。　**11.** ユーズドのダイニングテーブルから脚を取り外し、好みの天板を設置。少しでも手を加えれば、誰かによって使われた古物にも自分の色をプラスできる。ちなみに驚くなかれ。ダイニングテーブルにコーディネートしたチェアはもちろん、ソファまで『ジモティー』からの掘り出し物だ。　**12.** こちらの引き戸の取り付けもヘンミさんによるD.I.Y.。「アメリカ生まれの手法のようです。バーンドアというレールを用いれば、引き戸の設置は意外にも簡単」。コストパフォーマンスにも優れ、安価なものでは5000円台から手に入る。　**13.** 「税理士事務所とあって、オフィス仕様の物件。水回りは給湯室にまとめられているため、いわゆるキッチンがないんです」。そこでヘンミさんはコーヒーを淹れるスペースとしてカウンターを自作。こちらも角材を箱形に組んでいるが、腰板に当たるヘリンボーンまでD.I.Y.だ。

14

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

内装大工
阿部優樹さん

SPEC

居住地域 ： 東京都世田谷区
居住形態 ： マンション(賃貸)
間取り ： 1LDK
居住年数 ： 1年
築年数 ： 3年

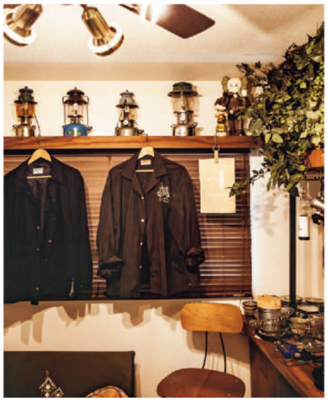
なにかと便利なカウンターは、天井に傷をつけないようにクッションを挟んだ突っ張り棒で固定。そこに手入れいらずのフェイクグリーンで彩りをプラスした。アパレル業の友人に依頼して暖簾を作ってもらい、リビングからキッチンが見えないようにして生活感を最小限に。

どこを見ても好きなものが目に映る、セルフリノベーションの部屋。

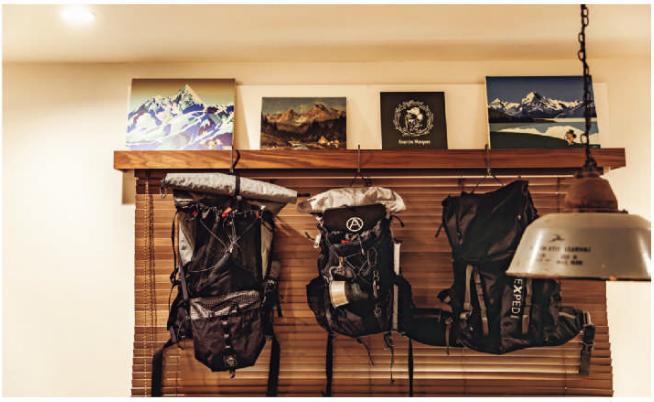
3年前、小誌で紹介させてもらった阿部さん。10年以上暮らしていた賃貸物件が取り壊しとなり、一昨年に引っ越したと聞きつけ、新たな住まいにも伺わせていただくことに。以前の住居は内装大工の知識と技術を生かし、自身で原状回復できる範囲のセルフリノベーションを施していたのが印象深い。結局取り壊しになったため無用な配慮になってしまったが、新たな物件も同様に手を加えていた。

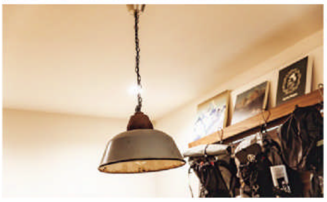
まず、以前から愛用している自作のカウンターをリサイズして設置。ここで食事や作業をしているそうだ。そして前の家と同様に、カーテンボックスにヴィンテージのガソリンランタンを飾っているが、そのカーテンボックスは自身で製作して取り付けたとのこと。センターテーブルも自作したもので、ブラインドとカーペットは採寸してオーダー。すべてがジャストサイズで収まっているのが気持ちいい。「まだ築3年だから、ビス打ちは最小限にして、フローリングに傷が付かないようにカーペットを敷いています」。壊れて破棄する店舗什器を譲り受け、リペアして使っているのも職人としての腕があってこそ。自身が手掛けたモノなら、ひと際愛着が湧いてくるはずだ。

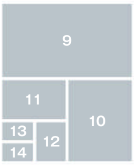
新しいアウトドアの趣味として、一昨年から本格的に登山を開始。リビングにキャンプギアを並べているが、寝室には登山ギアをディスプレイしていて、見せる収納を部屋によって変えているのも、さりげなく気が利いているポイント。家中のどこを切り取っても好きなものが目に入る空間の作り方は以前から変わっておらず、住み心地のよさがさらに高まっているように感じる。



1.ほぼ左右対称にレイアウトしたリビング。自作したセンターテーブルの天板は、マットな質感のメラミン化粧板で製作。その色合いは、アーシーなカラーリングでまとめたインテリアと絶妙にマッチ。テレビはブラケットをビス止めして、壁掛けに。穴は自身で修復できる。　2.テレビの下に飾っているのは、キャンプで使う照明。〈ネルデザインワークス〉のミツマタに〈スノーピーク〉のノクターンを装着していたり、〈プリムス〉の2245に〈マウンテンリサーチ〉のホヤとガス缶カバーを取り付けていたりと、自分好みにカスタマイズしたものばかり。　3.細々とした日用品などを収納できる便利なカウンター。設置していても圧迫感を覚えないのは、木材のカラーリングを部屋全体で統一しているから。　4.カーテンボックスに並べているのは、〈ティリー〉や〈コールマン〉のヴィンテージランタン。カーテンボックスにはハンガーを引っ掛けられるように工夫され、部屋中の木材と馴染むように調色して塗装している。　5. キャンプをきっかけに料理を作るようになり、小代瑞穂窯の福田るい氏が製作した器を集めている。　6. 〈キャプテンスタッグ〉のアルミ背付ベンチ用着せかえカバーに〈マウンテンリサーチ〉のワッペンをあしらった。　7.部屋作りにおいて、香りも欠かせない要素。茶香炉を使い、お茶の安らぐ香りを焚いている。　8.懇意の業者から譲ってもらった試作品のラックには、大好きな漫画のフィギュアを配置。







9.こちらが寝室。隣の家が近いため、窓のシャッターは常に閉めていて、〈マウンテンリサーチ〉と〈バリスティクス〉のキルトブランケットをカーテン代わりに使用する。そこに吊り下げているのは、登山用のシェル。〈無印良品〉のソファに、〈マウンテンリサーチ〉のブランケットを掛け、自分らしさをプラスした。　10.〈バイヤーオブメイン〉のチェアもカーテンレールに引っ掛け、洋服の収納に活用。下に置いてある丸太のテーブルは、壊れて破棄される店舗什器を救出してリペア。そこに登山ギアを配している。　11.こちらのカーテンボックスも自作。ジェリー鵜飼氏のアートを置くために製作したので、リビングのカーテンボックスと比べて奥行きは短めに設定した。飾っている登山用のザックは右が〈エクスペド〉、中と左は〈山と道〉を愛用している。　12.減らしたそうだが、まだまだ大量にある漫画は廊下に設けた本棚に。こちらも自身で製作したもので、ハンガーがずり落ちないようトップにレールを搭載。仕事着やよく着る服の定位置だ。　13.唯一寝室に置いているガソリンランタンは、〈コールマン〉が米軍に納入していたGIランタンの252Aで、1984年製のバースデーランタン。　14.ペンダントライトも壊れた店舗設備を譲ってもらい、修理して使用。味わいを感じるレトロ顔だが、シーリングスイッチを活用して、離れた位置からリモコンでオンオフできるようにした。光は落ち着いた色味で、寝る前にぴったり。

15

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

アパレル関係
katsu さん

SPEC

居住地域 ： 兵庫県神戸市
居住形態 ： 一戸建て（持ち家）
間取り ： 4LDK
居住年数 ： 5年
築年数 ： 67年

室内からも分かる独特な躯体のフォルム。断熱材が入っていないコンクリート造りのため、塗料で断熱処理を施した。2階に設けたリビングはカラフルに味付けし、アメリカ西海岸をイメージ。ヴィンテージ品やファニチャーが落ち着いた印象を与え、バランスよくまとまった。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Shogo Komatsu　取材協力／ RoomClip（Room.No.485833・katsu）、Instagram：@katsu_fj

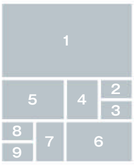
独特な外観デザインにひと目惚れ。仲間とフルリノベーションした築67年の家。

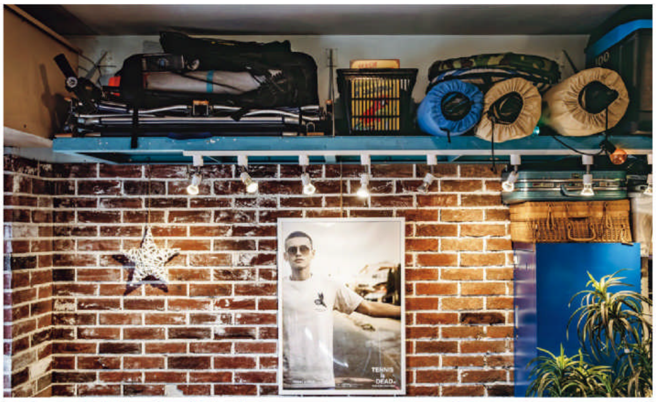
katsuさんが5年前に購入した邸宅は、1995年に建てられた元ペンキ屋の事務所兼倉庫。特徴的な外観と周囲の環境が気に入って即決した物件だ。「老朽化もあって、売れなければ取り壊すつもりだったみたいで。でも、この見た目が気に入って、リノベーションして住もうと契約したら、『本当に住むんですか？』と、前のオーナーが驚いていました。雨漏りもしていましたからね（笑）」。大工や造形師の友人に手伝ってもらいつつ、リノベーションを少しずつ仕上げていった。

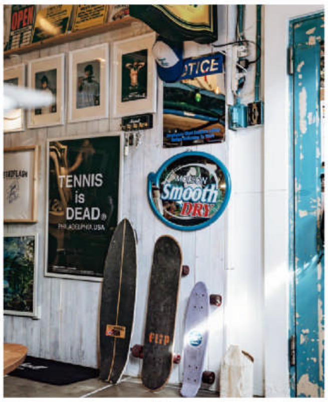
インテリアのコンセプトは〝ヴィンテージ〟。アメリカのフリーマーケットや国内外のガレージセールに足を運んで集めたヴィンテージ品を中心に、20ヵ国以上を旅行して手に入れた品々が家中を彩る。そして親子共通の趣味であるサーフィンや、katsuさんが幼少期から30代後半まで没頭していたスケートボードに関連したアイコニックなアイテムが随所に散らされていて雰囲気は抜群。2階のリビングは西海岸テイストのポップな装飾を施し、1階はニューヨークのブルックリンスタイルを意識したブリック調でシックにまとめ、それぞれの空間で異なるイメージを構築。

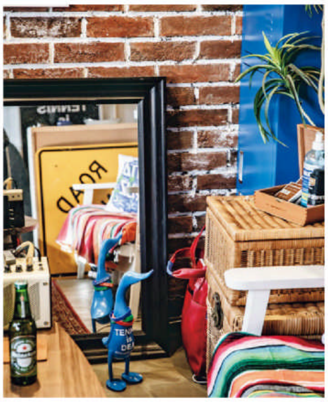
完成しているように見えるが、まだまだリノベーションしたい部分は多いそうだ。「子供部屋上のロフトや門柱は、自分でD．I．Y．しました。眺望のいい広い屋上もあるけど、屋外に設置されたハシゴでしか登れないので（笑）、室内からアプローチできる階段を付けたいと思っています」。新築から半世紀以上が過ぎ、新たな表情に生まれ変わったこの建物。これから先、子供の成長とともに、アップデートが繰り返されていくのが楽しみだ。

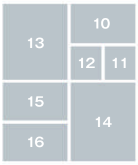
1.ダイニングテーブルとチェアは、「アーバン、サーフ、ナチュラル」をコンセプトに家具を展開する〈WTW〉のアペルト。オレンジのランプシェードは〈カルテル〉のフライで、シャボン玉のような光彩を放つ。奥のキッチンは、子供と一緒に料理ができるように広めに設計した。カウンターは自作して、モルタルとタイルで装飾をあしらった。使っていないファンボードが飾られている。　2.家中に飾られている小物にも注目。ここには〈シュライヒ〉のフィギュアで遊び心をプラスした。　3.バンドを組んでいたkatsuさんらしい〈マーシャル〉のスピーカー。レトロなミニカーもかわいらしい。　4.玄関から2階に繋がる階段の壁面はブルーで塗装。エリック・コストンやガイ・マリアノ、シーン・マルトなど、愛するスケーターたちのシグネチャーデッキをディスプレイ。　5.観葉植物は西海岸を連想させるヤシの仲間をチョイス。　6.いろいろ探した結果、一番よかった〈ニトリ〉の3人掛けソファと、〈イケア〉のパーソナルチェア。船乗りだったkatsuさんの父から譲り受けたディスプレイ用の操舵輪を壁に配して、マリンテイストをより加速させる。7.ステンドグラスの〈コカ・コーラ〉のランプは、ロサンゼルスで毎年開催されているアメリカ最大級のフリーマーケット、ローズボールフリーマーケットで購入した。　8.玄関からリビングに繋がる階段の扉もレトロ感が漂う。　9.コロナ禍のステイホーム中にD.I.Y.したロフト&子供部屋。しっかりとした作りで完成度が高く、塗装にも味が出ている。











10.造形師の友人が手掛けた1階の壁の素材はモルタル。型押しで形成し、ペンキで塗装したことで、本物のレンガさながらの見た目に。上部にはギア類を収納する。 **11.**レトロなピクニックバスケットやロッカーもアメリカを感じるアイテム。キーカラーに設定したブルーを所々に配しているので、全体的にまとまった印象を受ける。 **12.**写真やポスターなどを壁一面にディスプレイ。立てかけてあるクルーザーデッキは移動用に使用しているもの。 **13.**〈イケア〉のテーブルと〈フランフラン〉のソファ。メキシカンラグと〈サンタクルーズ〉のクッションがポップさを加味する。 **14.**購入の決定打となった、オクタゴンのユニークな外観デザインが洒落ている。白い外壁にネイビーの扉がよく映え、まるで海外の家のよう。愛車は'95年式の〈トヨタ〉ハイラックスサーフ。オールペン済みの中古車を購入し、現在走行距離が20万キロオーバーとなっても現役だ。ルーフトップテントを装備し、去年家族で海岸に車中泊しながらサーフィンを楽しんだそう。 **15.**愛車のグリルや沖縄のフリーマーケットで購入した〈三菱〉の扇風機、〈ペプシコーラ〉のノベルティのサーバーなどを収納。普段使っているサーフボードはこちらに。照明にマリンランプを備え、katsuさんの家系のルーツと大好きな海を演出している。 **16.**中庭にテーブルとチェアをセット。床はレンガ調の壁と同じくモルタルを使い、表面を型押ししてタイルのように仕上げた。奥のさびれた看板も雰囲気作りの一助に。

16

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

自営業
小川 洋一郎さん

SPEC

居住地域　：　埼玉県春日部市
居住形態　：　一戸建て（持ち家）
間取り　：　0LDK＋ロフト
居住年数　：　1年6ヵ月
築年数　：　18年

大ぶりのランタンやストーブを筆頭に、リビングのラックにディスプレイされたギアの大半がヴィンテージ。「ヴィンテージ特有の佇まいだけじゃなく、手に入れるまでの過程も楽しいんです」。目当てのギアを手に入れるため、蚤の市を訪れることもしばしばだとか。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya　取材協力：ハグホーム　https://hughome.net/

LDKの一角はキャンプ好きのニュアンスが色濃く漂う板壁に。通常は外壁に用いられる板材を使用し、3種ものステインを塗布。程よくエイジングされたイメージに仕上げている。

開放的にユニークに、家主の自由な発想で色づけする“0LDK”。

リビングのラックにディスプレイされたギアの数々から一目瞭然だろう、小川さんの趣味はキャンプ。子供と一緒に楽しむアクティビティとしてキャンプを始めたのをきっかけに、ヴィンテージギアを収集することの虜に。ヴィンテージにこだわる理由を尋ねると、「またと同じものがないからです」と答えてくれた。誰かの手によって使い込まれたギアは、まさに唯一無二。ヴィンテージが持つふたつとない趣を好む小川さんだけに、住まいの表情もユニークだ。

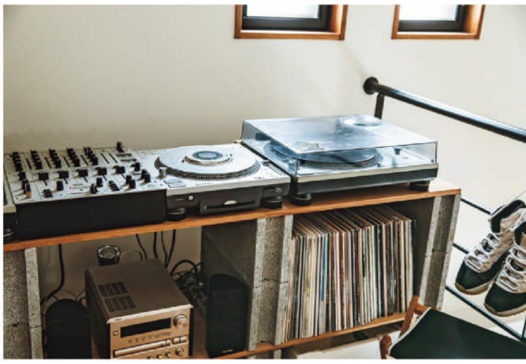
祖父から父へ、父から小川さんへと受け継がれた鉄骨造の一軒家は、クルマ好きなら一度は憧れるビルトインガレージ。その外観だけでも目を引くが、小川さんは内装をフルリノベーション。3LDKだった間取りをスケルトンに解体し、斬新な〝0LDK〟へと生まれ変わらせた。

リノベーションを手掛けたのは〝一過性の流行に左右されないもの創り〟をデザインコンセプトに掲げる『ハグホーム』。「家族がのびのびと暮らせる開放感も、子供一人ひとりのプライベートも妥協したくなくて」という小川さんの親心を実現するため、広々としたLDKに3つに仕切られたキッズルームを設置。子供のプライバシーと家族の一体感を両立させた造りがおもしろい。

「従来の間取りにとらわれることのない〝0LDK〟の開放感が気に入っています。浮かぶようにディスプレイした植物のように、広々としたスペースだからこそ、いろいろなことをしてみたくなるんです」。ユニークな家の造りに家主自身の発想がプラスされ、小川さんの住まいはよりオリジナリティを増していく。

リノベーション前からロフトのある構造だった小川邸。以前のハシゴで登る仕様から階段に改装し、マットブラックの階段が白壁や植物のナチュラルな印象を引き締めている。

グリーン好きの一面も持つ小川さん。庭の植物用ラックはコンクリートブロックを脚にする形でD.I.Y.。屋内にあるグリーンと合わせると、50株近くの植物を育てているそう。



ロフトの一角は小川さんのプライベートスペース。レコードプレイヤーにターンテーブルも備え、レコードが詰まったラックは板材とコンクリートブロックを用いてD.I.Y.。

1.小川さんの住まいは、ガレージの上に三角屋根の平屋をのせたような造り。玄関からLDKに通じる階段の踊り場には〈ステューシー〉のポスターをセット。　**2.**玄関にレイアウトされたウッドベンチにも植物がディスプレイされ、その隣はリビングにもセットされている『P.F.S.』別注のローンチェア。1960年代アメリカを象徴するレトロなデザインが、ヴィンテージ好きの小川さんらしいセレクトだ。　**3.**ギアのディスプレイラックは見るからに屈強な〈メタルシステム〉。棚板の高さも自由に調整できる。**4.**ウッドやタイルにステンレスといった異素材がバランスよくミックスされたキッチン。壁に設けた小窓が抜け感をプラスし、グリーンのタイルがモダンなアクセントに。**5.**こちらがLDKの一角に設けられたキッズルーム。しっかりと仕切りながらも天井にはすき間を残し、プライベート感と家族の一体感を両立。将来的にはキッズルームの仕切りを取り外すこともできる仕様だ。　**6.**小川さんがゆったり趣味の時間を過ごすロフトには〈ペレグリンデザインファクトリー〉〈バリスティクス〉〈ネイタルデザイン〉によるコラボベンチをセット。　**7.**天井のダクトレールからメッシュパネルをハンギングし、流木やドライフラワーを大胆にディスプレイ。植物が宙に浮いているように見え、真似したくなるアイデアだ。　**8.**キャンプ好きらしく愛車は2014年式のラングラーだが、「ラングラーを買ったのをきっかけにキャンプを始めたようなものです」と笑う。

小川邸にはテレビがなく、その理由は大迫力のプロジェクター。こちらのイスに腰掛けて映画やスポーツ中継を見るのが日課だが、左は米国の映画館で使用されていたヴィンテージ。

鉄骨造の住まいはハンモックを筆頭に植物をふんだんに吊しても余裕のタフさ。ダイニングにセットされた丸テーブルは、リノベーションを手掛けた『ハグホーム』のオリジナル。

17

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

会社員
白幡祐樹さん

SPEC

居住地域	：	群馬県太田市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	3LDK＋ガレージ
居住年数	：	9年
築年数	：	9年

室内も全面がウッドに覆われた、ザ・ログハウスの趣。「住み始めてから約9年が経ち、木の色合いが少しずつ赤みを帯びてきた実感があります」という温もり豊かな空間に吹き抜けの構造が抜け感をもたらし、随所にあしらわれた下がり壁が部屋にデザイン性をプラス。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya

外遊び好きの憧れ。“手間ひま”を謳歌する、ログハウスの暮らし。

白幡さんは週末のたびに外遊びに繰り出すという、大のアウトドア好き。キャンプや登山に始まり、カヌーやSUPといったウォーターアクティビティにもご執心だ。今の住まいも長閑な田舎ですが、本当は山奥に移住したいくらい」という自然への憧れは住居にも色濃く反映され、9年ほど前に建てたマイホームは正真正銘のログハウス。ログハウスの設計・施工を専門に手掛ける工務店に依頼し、折れ屋根が印象的な住まいを完成させた。

無垢のパイン材を用いた壁が見た目にも柔らかく、玄関の脇にセットされた薪ストーブが全面木張りの空間にマッチ。その反面、ログハウスに住み続けるためには定期的なメンテナンスが欠かせず、薪ストーブを使うには当然、薪割りの作業が必要となる。白幡さん自身も「これがなかなか面倒です」と苦笑いするが、日常に生じる手間こそが、この家に住み続けることの醍醐味。あえて手間をかける姿勢はキャンプ道具のコレクションにも表れ、白幡さんが所有するギアの多くがヴィンテージだ。

リビングにディスプレイされたランタンの数々が家主の偏愛を物語るが、とりわけ目がないのがヴィンテージのテント。「機能性も快適性も、最新のテントには敵いません。それでも現行品ではなかなかお目に掛かれないシルエットや色彩は捨てがたく、ちょっとした不便を楽しむのもキャンプのおもしろさじゃないですか」。つまりは野営の手間を楽しんでこそのキャンプ。ヴィンテージのテントをこよなく愛する白幡さんだからこそ、手間をかけながら暮らすログハウスに惹かれたに違いない。

18+

WHAT IS
AVAXHOME?

AVAXHOME -

the biggest Internet portal, providing you various content: brand new books, trending movies, fresh magazines, hot games, recent software, latest music releases.

Unlimited satisfaction one low price
Cheap constant access to piping hot media
Protect your downloadings from Big brother
Safer, than torrent-trackers

18 years of seamless operation and our users' satisfaction

All languages
Brand new content
One site

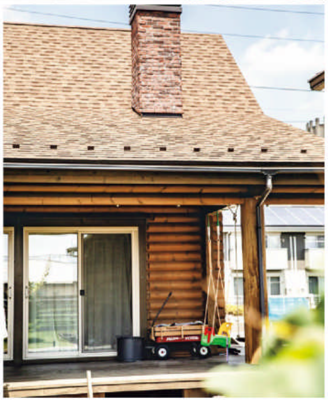
AVXLIVE.ICU

AvaxHome - Your End Place

We have everything for all of your needs. Just open https://avxlive.icu

1.白幡さんはギア収集も趣味。それだけにウォールラックにずらりと整列しているのは〈コールマン〉のシーズンズランタン。そのカラフルな並びがウッドの空間にメリハリをプラスしている。　2.「多趣味なことに加え、とにかくモノが捨てられない性格なんです」。趣味の道具を収納するために建てたのが、庭のガレージ。ウォーターアクティビティに欠かせないフローティングベストやチルバハットは梁にハンギングしている。　3.リビングとダイニングの境目にデザイン性の高い下がり壁をプラス。壁の設置とカットは職人の仕事だが、アウトラインは白幡さん自身が描いたというから驚きだ。　4.ダイニングとキッチンを仕切るのも下がり壁。コンロの背面にはレンガをあしらい、耐火性とデザイン性を両立させている。　5.白幡さんはD.I.Y.もお手の物とあって、ランタンや雑誌を収納しているラックは自作。ウッドが主役の空間に、ブラックのパイプがちょっとしたアクセントに。ちなみにこちらのラックに並んでいるのは、家主のヴィンテージ好きを物語る〈デイツ〉のランタンだ。　6.「キャンプにハマる以前から、ずっと古着好き。ヴィンテージギアが好きなのも、ルーツは古着にあるのかもしれません」。住まいにはウォークインクローゼットも備え、古着屋さながらの仕上がり。　7.こだわりの折れ屋根は屋内からも見て取ることができ、友人が泊まりに来た際の客間としている1室には〈バイヤーオブメイン〉のコットをセット。

2	1
5　4	3
7	6



8.住まいに合わせるようにガレージも全面が木張りのログハウス調をオーダーし、屋内に設置されたラックはすべてがD.I.Y.。いかにも年季の入ったウォータージャグを筆頭に、これまでに収集したヴィンテージギアたちがぎっしりと詰まっている。　9.アウトドアやD.I.Y.のみならず、白幡さんはバイクとクルマも好きという多趣味の持ち主。〈AMC〉時代に製造された1977年式の〈ジープ〉から1951年式と1984年式のハーレー、ソロキャンに出掛けるときの相棒だというカブまで所有する。さらには「最近は時間が取れていませんが、バイクをセルフカスタムするのも好きなんです」と話し、ガレージのラックには工具やカスタム用のペンキも並ぶ。　10.白幡さんが特にこだわったのがログハウス定番の折れ屋根。広々としたウッドデッキも備えているが、「週末ごとに外に出掛けてしまうので、実はあまり使っていないんです」とのこと。　11.庭には薪専用のラックを備え、住まいの内壁と同様に外壁も無垢のパイン材。家を雨や紫外線から守るため、数年に一度は木材保護塗料の塗り直しが必要だが、しっかりとメンテナンスを続ければ、100年以上も保つのがログハウスだ。　12.薪ストーブは〈ダッチウエスト〉のプロダクト。キッチンのコンロ周りと同じく、薪ストーブの背面も耐火性に優れたレンガ仕様に。ちなみに天井を這うようにディスプレイされた流木にハンギングされているのは、バイク好きの白幡さんらしくバイカーズベストだ。

18

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

フォトグラファー
kyaruさん
会社員
kotaさん

SPEC

居住地域	：	千葉県柏市
居住形態	：	マンション（賃貸）
間取り	：	3LDK
居住年数	：	２ヵ月
築年数	：	約20年

直線的な家具を多用したリビングはナチュラルモダンな印象だが、kyaruさんの“好き”を物語るキャンプの要素が随所に。そこかしこにギアが顔を出すだけでなく、グラフィックと共に壁に飾られている写真は〈スノーピーク〉のカタログから切り出したひとコマだ。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya

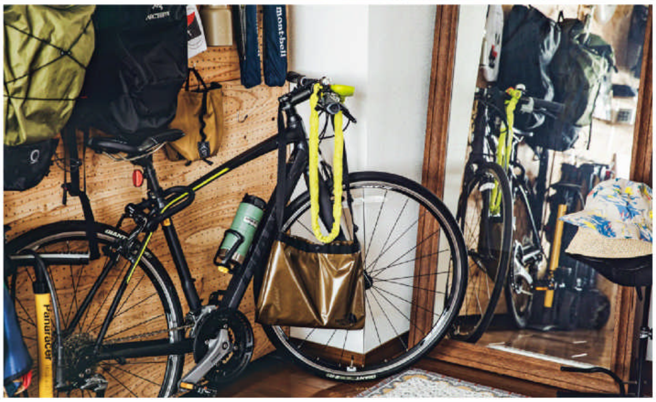
“好き”を詰め込むからこそ。頻繁な模様替えがもたらす、住まいへの愛着。

共にキャンプ好きであるkyaruさんとkotaさん夫妻。聞けば、妻のkyaruさんが夫のkotaさんをキャンプの沼へと引き込んだ形だ。フォトグラファーとして活動するkyaruさんは大学では建築を学び、大のインテリア好きでもある。ゆえにキャンプの醍醐味のひとつがサイト設営。「山の麓だったり海辺だったり。ロケーションによって背景になる景色はさまざまですよね。その土地の景色に溶け込むようにサイトを作り上げるのが楽しくて」。

非日常的な光景が広がるアウトドアに対し、インドアは日常の空間。暮らしの拠点となる場所だけに「とにかく好きなモノを詰め込んでいます」。夫妻が憩うダイニングテーブルにはキャンプ用のチェアがコーディネートされ、クローゼットにセットされた有孔ボードには〈スノーピーク〉からセレクトしたベストをディスプレイ。あらゆる趣味のアイテムと共にランタンが顔を出すのはもちろん、そこかしこにレイアウトされた植物もまた、住まいにアウトドアのニュアンスをプラスしている。

白壁に飾られたグラフィックや写真のモダンさと野外の趣が見事に調和しているが、「なかなか完成形にはたどり着けません。何かひとつでも家具や雑貨を買い足すと、ついつい模様替えをしたくなってしまうんです」。土地の景色によって美しいサイトの定義が変わるように、新たなアイテムの仲間入りが住まいの表情を変化させる。すると、より完成された日常の光景を求めてはインテリアをアップデート。こまめな模様替えが家主の“好き”を際立たせ、住まいへの愛着を深まらせていく。

1.〈ラブリコ〉のアジャスターを用いて設置したベッドルームのディスプレイラックは、有孔ボードとOSB合板のデュアル仕上げ。OSB合板を用いれば、テレビのように重量ある家電も壁掛けが可能になる。　2.キャンプギアを収納しているクローゼットの一部にも有孔ボードをセットし、〈スノーピーク〉のベストをはじめとするお気に入りのアイテムは“見せる”のが鉄則だ。　3.「夫婦共通の趣味なんです」というグリーンの数々は、かつての住まいから持ち込んだそう。植物の生き生きとした緑が白壁に映え、『イケア』からセレクトしたランプシェードのラタン素材が柔らかなアクセントに。　4.LEDランタンやカメラがディスプレイされているラックは、関西ではおなじみのアウトレット家具の店『アカヤ』からの掘り出し物。その左隣に見えるスチール製のラックは『イケア』からセレクトした園芸用とのことだ。　5.ベッドルームのディスプレイラックを筆頭に、D.I.Y.の多くはkotaさんの仕事。OSB合板をベースにウッドを多用したD.I.Y.が部屋にアウトドアの趣をプラスしているが、マガジンラックとして取り付けている〈ダルトン〉のトライアングルフックは真鍮のようなマテリアル。ウッドに紛れ込ませたメタリックな素材感が洒落ている。　6.玄関に設置したシューズラックもkotaさんによるD.I.Y.。〈ラブリコ〉のアジャスターを用いて支柱を立て、ラックの隣には有孔ボードもセット。いかにもキャンプ好きらしい面持ちの玄関に。



7.こちらのカウンターテーブルもkotaさんによるD.I.Y.というから天晴れ。腰板にはあえて木目の粗い板材を選び、エイジングを感じさせる仕上がりに。　8.ダイニングテーブルには〈スノーピーク〉のハイチェアをコーディネート。部屋には〈コールマン〉のインフィニティチェアもセットされ、愛すべきキャンプギアがインドアでも活躍する。　9.キッチンの壁に設えたラックはkyaruさん作。〈ラブリコ〉のアジャスターによって角材を格子型に組み、細かくスペースを区切ったのはもちろん、強度までしっかり。　10.アシンメトリーなデザインのラックはアイアン製のフレームのみを購入し、好みの色合いの天板をセット。ここにも〈ペトロマックス〉のランタンや〈ファイヤーサイド〉のグランマーコッパーケトルといったギアが顔を出すが、隣り合わせたフェミニンな植物とのコントラストがニクい。　11.さすがはフォトグラファーとあって、ラックにはカメラもディスプレイ。ちなみに最上段に置かれたLEDランタンは〈バルミューダ〉のプロダクト。ミニマルなデザインがインドアにも映え、バッテリー内蔵なことからアウトドアでも重宝する。　12.kotaさんが通勤用に愛用するクロスバイクは〈ジャイアント〉。ギアがディスプレイされたラックによく似合う。　13.リビングにレイアウトされたソファは『イケア』からセレクト。〈ペンドルトン〉のブランケットが添えられ、ソファの隣には〈アラジン〉の電気ストーブが顔を出す。

19

Living With My Favorites 2023

PROFILE

自営業
小久保 寧さん

自営業
熊谷弥香さん

SPEC

居住地域	：	京都府京都市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	0LDK+工房+アトリエ+屋根裏
居住年数	：	6ヵ月
築年数	：	100年以上

築100年を超える約60㎡の平屋から天井や内壁を抜き、LDKに工房とアトリエ、さらには屋根裏を備えた住まいにリノベーション。屋根裏に寝床を設けるも仕切りは付けず、間取りは開放的な0LDK。ベッドスペースを除いては土足というスタイルも訪れる人を憩わせる。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya

ここは皆のシェアスペース。おのずと人が集う、現代解釈された古民家。

2

人が暮らすのは、築100年を超える正真正銘の古民家だ。京都を拠点とする建築事務所『ランチ！アーキテクツ』を営み、2人の友人でもある和田寛司氏が描いた図面のもと、内装や外壁から断熱材の施工に至るまで、住まいにかかわる大方をセルフリノベーション。仕切りの一切ない〝0LDK〟へと造り変えた。

プロの助けを得ながらも自分自身の手で造り上げるハーフセルフビルドは、やり甲斐と自由度の高さの分だけ手間と時間を要する。それでも2人は「和田クンをはじめとする友人たちとの二人三脚。一緒に完成させたという実感があります」と口を揃え、友人と共に造り上げた住まいもまた、彼らとのシェアスペースだ。

「そもそも〝家＝プライベート空間〟という意識が希薄なんです」。そう話してくれた寧さんは地域開発や商業空間、イベントやコンテンツの企画制作に従事。「地域開発にしても商業施設やイベントにしても、人がおのずと集い、楽しめるスペースを創出したくて」という姿勢は自宅にも貫かれ、2人は自身の住まいを使い方も自由に開放している。事実、誰かしらがふらりと顔を出しに立ち寄るほか、2人は友人を招いたホームパーティも頻繁に開催。さらには自宅の一角に菓子工房を設け、スペースのレンタルも行っている。

誰もが気兼ねなく立ち寄ることができ、羽を伸ばせる理由は「ベースが古民家だからかもしれません」。加工ではけっして演出することのできない100年の時を刻んだ躯体の安心感と、仕切りの一切ないオープンな造り。安心感と開放感の融合が友人たちを呼び寄せ、くつろがせる。

1.キッチンはカフェバー顔負けの仕上がり。天井からスクエアに切り出した板をハンギングし、ボトルのディスプレイにするアイデアも斬新だ。ちなみにカウンターテーブルにセットされた〈コールマン〉の古いツーバーナーはコーヒー専用。これならペニンシュラキッチンさながらに住まいを訪れる友人と顔を合わせ、会話を楽しみながらコーヒーを淹れられる。　2. D.I.Y.のダイニングテーブルには〈飛騨木工〉のチェアをコーディネート。木造の古民家は冬の寒さがネックだが、ガラスチムニーにカスタムされた〈アラジン〉のストーブにより、奥行きの深い平屋もしっかりと温まる。　3.こちらはLDKの一角に設けられた寧さんのワーキングスペース。出窓には、現在も外遊びの際に活躍しているというランタンが並ぶ。その様子が彼のアウトドア好きを物語るが、多くが「実用性はもちろん、佇まいの美しさに惹かれます」という海外からの並行輸入品。今も弥香さんと2人、月に一度はキャンプに出掛けるそう。　4.いかにも京都の古民家らしく、2人の住まいはコンパクトな間口に反して奥行きの深い“うなぎの寝床”。庭も住まいの奥にあり、その庭をウッドデッキのテラスにリメイク。デッキにも複数のアウトドアチェアをはじめとするギアが並び、家主のキャンプ好きを浮き彫りにしている。　5.寧さんのデスク脇のラックにはインスピレーションの源となるアートブックが並び、なかには〈モステント〉の往年の名作が収録された写真集も。

1	
3	2
5	4

6.黒みを帯びた梁が古民家の歴史を物語るが、耐震補強のため、元々の梁に新たな木材をプラス。新たに加えた木材の一部は京都市内の森林から産出された〈みやこ杣木〉、つまりは地産地消だ。ちなみに2人は4匹のネコを飼うほどの愛猫家。屋根裏には躯体の補強とキャットウォークを兼ねた木材もプラスしている。　7.家主が憩うのはもちろん、家主の友人たちが集うフリースペース。座面と肘掛けをカスタマイズしたニーチェアのほか、友人がやって来た際には天井からハンギングした〈カーミットチェア〉を降ろし、ここで会話を弾ませる。　8.電気釜を備えた一角は、弥香さんが陶芸に没頭するアトリエ。屋根裏の立ち上がりをはじめ、グレーの壁は半田仕上げ。漆喰に2種類の土を混ぜ、あえてラフな質感に。無論、左官の作業も友人の手を借りながらのD.I.Y.だ。　9.奥に見えるのは菓子作りのための工房。弥香さんは『ででぽぽ製造所』としてシェア菓子工房を主宰し、この工房で自家製のスイーツやジャム、パンなどを製作。共に活動する友人とマルシェに参加している。　10.デジタルの色合いが強い音響セットさえも古民家の趣と調和する理由は「D.I.Y.の素材に古材や廃材を用いているから」。すると機器を収めたラックにおのずと経年のニュアンスが宿り、住まいの風情にも違和感なくなじむ。　11.テレビの横、ストーブがセットされているのは〈オーランドストーブ〉の薪ストッカー。部屋の随所にキャンプの要素が顔を出す。

20

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

柔道整復師
相羽亮太さん

SPEC

居住地域　：　群馬県伊勢崎市
居住形態　：　マンション（賃貸）
間取り　：　1LDK
居住年数　：　4年
築年数　：　4年

相羽さんは奥さんと愛猫のぶう（♂）との2人＋1匹暮らし。部屋全体がのっぺりした印象にならないようD.I.Y.に用いる板材には深めのブラウンをセレクトしているそう。すると白壁をベースに深いブラウンが締め色の機能を果たし、空間にメリハリがプラスされる。

肩肘張らないハイセンス。そのバランスの秘訣はD.I.Y.と客観視。

インテリアに凝るあまり、生活が窮屈になっては本末転倒。近い未来に戸建ての購入を視野に入れている相羽さんにとって、インテリアと予算のバランスはより現実的な問題だ。しかし、彼の住まいにチープさは皆無。聞けば、心地いい空間と然るべき予算を両立させる秘訣はD.I.Y.だという。

相羽さんは「ハンドメイド好きの母の影響でしょうか、自作することが身に染みついているんです」と話し、有孔ボードを用いたディスプレイボードも、漫画本が詰まったラックも手作りだ。1LDKの賃貸マンションは収納の少なさがネックだが、備え付けの小さな納戸にひと手間を加え、クローゼットまでD.I.Y.。そこに『イケア』や〈無印良品〉をはじめとするプチプライスの家具や雑貨を上手に取り入れ、肩肘張らないハイセンスを叶えている。

この気負いすぎないテイストは、彼にとって重要な要素。「人の身体を整える柔道整復師という仕事柄、日常の生活からリラックスできる部屋づくりを意識しています」。リラックスを念頭にコーディネートされる相羽さんの部屋はインテリア好きの心をつかみ、インスタグラムのフォロワーは1万人以上にものぼる。

同時に相羽さんのセンスを支えているのは"撮ること"にもあるという。「暮らしの記録として始めたインスタですが、写真に撮ると部屋全体のバランスがよく見えてくるんです」。それはつまり、自室を俯瞰する客観の視点。D.I.Y.も家具や雑貨のレイアウトも、自室を撮っては客観的に眺めてみることの繰り返しが相羽さんのセンスを育み、居心地よくも洒落た空間を形づくる。

1.つい目を引かれるポスターは、カスタマイズ可能なアートを展開する〈マピフル〉のプロダクト。相羽さんの住まいの上空に広がる天体図がデザインされ、その隣には〈ナイジェルグラフ〉のアートをディスプレイ。2つのアートの間に設けた絶妙な余白が、互いの存在感を引き立てている。　2.ダイニングスペースの壁にはワイヤーネットを取り付け、余白をバランスよく埋めながら有効活用。ワイヤーネットの上には〈マーベル〉とコラボレートした〈メディコム・トイ〉のベアブリックが並び、「実は収集癖があるんです（笑）」。さりげなく並んだコレクションのトイも、部屋のちょっとしたアクセントに。　3.相羽さんは大のコーヒー好き。愛用するコーヒーギアはすっきりコンパクトかつ手に取りやすく、〈無印良品〉のウォールラックに収納している。　4.『イケア』からセレクトしたダイニングテーブルには、デザインの異なる複数のチェアをコーディネート。手前は『イケア』のスツール、奥に見えるのは群馬県に2店舗を構えるヴィンテージ家具の店『レトロボックス』から購入したそう。　5.キッチンとダイニングの境目にもワイヤーネットを張り、コーヒーの洒落たパッケージをディスプレイ。　6.2021年5月に家族の一員として招き入れたという愛猫のぷうが佇んでいるローテーブルは、『楽天市場』のショップで約1万円というリーズナブルさ。ガラスの天板に棚板も付き、つい散らかしがちな雑誌も“見せる収納”が可能に。

8	7
11 10	9
12	

7.キッチンの壁に設置したラックは相羽さんの自作。〈ラブリコ〉のアジャスターによって設置した支柱に棚板とワイヤーネットを取り付け、ハンギングも可能な仕様に。調理器具もカップ類もシルバー・ホワイト・ブラックの3色に統一し、すっきりとした印象に見せている。　**8.**ベッドルームに備え付けられた納戸はクローゼットとして活用。おなじみの〈ラブリコ〉とガチャ柱を併用し、棚板の高さも自由自在な衣装ラックをD.I.Y.している。ちなみに相羽さんが日曜大工に勤しむ場所はホームセンターの『カインズ』。「D.I.Y.のスペースが用意され、工具のレンタルもできます」。　**9.**テレビボードとしても機能しているラックは、板材とコンクリートブロックを重ねる形で自作。収納物の高さに合わせるようにブロックの寸法を変え、さらにはブロックにあいた空洞もちょっとした収納スペースとして有効活用している。　**10.**気に入ったデザインのポストカードやフライヤーは壁にディスプレイ。壁の余白をバランスよく埋める秘訣こそ、「写真に撮っては客観的に眺めてみること」だ。　**11.**備え付けの照明では、どこか味気ないのが賃貸物件のネック。相羽さんはマリンランプに付け替えているが、意外にも『ニトリ』のプロダクトだそう。　**12.**アートが飾られたディスプレイボードの下、漫画本が並んだラックも自作。コンクリートブロックによって強度抜群。棚板にOSB合板を選べば、ちょっとしたステッカーや灰皿も抜群に映える。

21

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

会社員
松田有平さん

SPEC

居住地域	：	神奈川県茅ヶ崎市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	4LDK＋土間
居住年数	：	1年8ヵ月
築年数	：	1年8ヵ月

漆喰の白壁にフローリングと家具の木目、グリーンの緑が組み合わさり、自然体ながら洗練されたインテリア。右手に設置された大開口の窓は縁側のある庭に通じており、愛犬の日向ぼっこにも、車の荷物の積み下ろしにも便利。動線まで考え尽くされている。

Photo ／ Chie Kushibiki Text ／ GO OUT

趣味を楽しむ余白を残した、トレンドに左右されない家。

海まで徒歩圏内でありながら、塩害はない好立地。新居を探していた有平さん夫婦は、約1年半前にこの土地と出会った。海や自然が近い茅ヶ崎という土地柄もあり、目指したのは天然素材にこだわった住まい。「湘南の〈エコモ〉というハウスメーカーに依頼しました。家づくりにあたって吹き抜けを取り入れたトレンド感のある造りも検討したんですが、自分たちには少し違うかなと思って。流行に左右されないナチュラルな雰囲気で、歳を重ねても永く住めることを重視しました」。そう語るとおり、板張りの外壁や漆喰の室内壁、配置している家具におけるまで、家全体に自然で普遍的なテイストが漂っている。

特徴的なのはその特殊な間取りだ。4LDKではあるが、ゆとりのある土間とベランダを備えており、表記以上に広々とした居住空間になっている。「もともと釣り具や靴をたくさん持っていたので、玄関の土間スペースは広めに確保しました。収納できることはもちろん、汚れを気にせずに趣味の道具をメンテナンスできるのもいいところ。以前はマンションに住んでいて、狭い玄関にモノが溢れ気味でした。自由に使えるストレスフリーな玄関土間は、戸建てならではの特権かもしれませんね」。

釣りのほかに、最近では植物にもご執心だという有平さん夫婦。リビングをはじめ、ベッドルーム、廊下、ベランダと家の随所にグリーンが配置されている。2階に設けられている広いベランダが、鉢替え時に役立っているのだとか。土間やベランダといった家にとって余白ともいえる空間。その場所があるという気持ちのゆとりが、趣味人のライフスタイルを支える一助となるのだろう。

1.実に50足近くのシューズが収納されている玄関の土間スペース。〈イケア〉のシェルフユニットが偶然にもシンデレラフィットだったそう。〈クラッシュゲート〉の姿見は空間に合わせて大きめのサイズをセレクト。　2.漆喰の白壁とナチュラルな木のテイストを基調としたLDK空間にはグリーンがよく映える。床や卓上、吊るしと適度にミックスされた配置が心地よいバランス。愛犬のイングリッシュブルドッグ、ムー君の写真は額装して壁掛け。　3.リビングのローテーブルは「ヤフオク」で購入。メーカーは不明だが、ソファの脚とマッチする色合いを意識してブラウン系の色味にした。家具はリサイクルショップやオークションを使って賢く集めている。　4.自他ともに認める“釣りバカ”である有平さんのルアーコレクション。100本近く所有しているうちの一部を書斎に吊るしてレイアウト。　5.メインの釣り竿は土間スペースに収納。思い立った時にすぐにメンテナンス可能。　6.靴は夫婦ミックスで並べている。メンズとウィメンズを混ぜることで棚板の幅にちょうどよく収まるのだとか。無垢のパイン材シェルフには、ドライフラワーをアクセントとして括り付けている。　7.鍵やフレグランス、そのほか玄関周りに置いておきたい小物類はシェルフとは別途ラックにまとめてアクセスしやすく。小さめのグリーンも配置することで生活感を抑制させるという真似したいアイデア。

8.ベランダの床には〈イケア〉のウッドパネルを敷き、板張りの外観とテイストを合わせている。プライベート感を演出するために、隣の建物と近い面にはブラインドを設置。　9.多種多様なグリーンは、小さいものから鉢替えして徐々にサイズアップさせたものがほとんど。最近では盆栽にも挑戦しているという。天井からは流木を吊るして鉢をハンギング。上下の物量が絶妙な塩梅だ。　10.ベランダは建物の輪郭をなぞるように設計されており、2階の寝室と廊下のほか、1階のリビング奥の階段からもアクセスできる。ゆとりある設計で夏場には愛犬のプールスペースとしても活躍中。　11.大きめのグリーンと清潔感のある白い座面のソファが、どこかリゾート感のある雰囲気を醸し出している。「浴室からベランダまでの動線がいいので、風呂上がりの外気浴に最適です」。　12.板張りの外壁は、家づくりで絶対に譲れなかったポイントのひとつ。ホワイト×ウッドのナチュラルで飽きのこない外観を目指した。　13.リビングにはリサイクルショップで購入した〈マスターウォール〉のソファを配している。張り地を変えることも想定して、長く使えるものを選んだそう。　14.キッチンカウンターは適度な高さの仕切りを設けることで、生活感をまったく感じさせない。〈アクタス〉のダイニングテーブルとチェアはもちろん、照明にも木の質感をプラスして自然素材でまとめ上げている。

22

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

クロスパーク代表
古俣勇一さん

SPEC

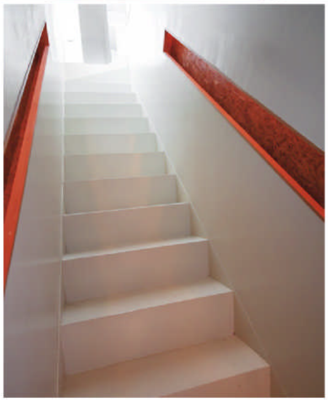
居住地域	：	新潟県新潟市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	4LDK
居住年数	：	18年
築年数	：	18年

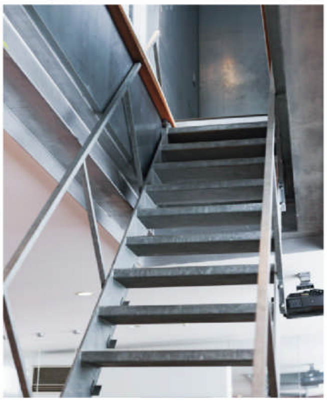
モダンな印象を与える壮麗なリビングは、ミッドセンチュリー期の名作家具たちに囲まれ、エレガントな気分を味わえる空間に。クリアガラスによる採光や当時としては最新であったアイランドキッチンなど細部までこだわり抜かれた設計も見所。

Photo ／ Wataru Shoji（GATAFORNIA） Text ／ Yuho Nomura

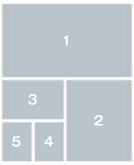
有名建築家の手掛けた、ミニマルなミッドセンチュリー空間。

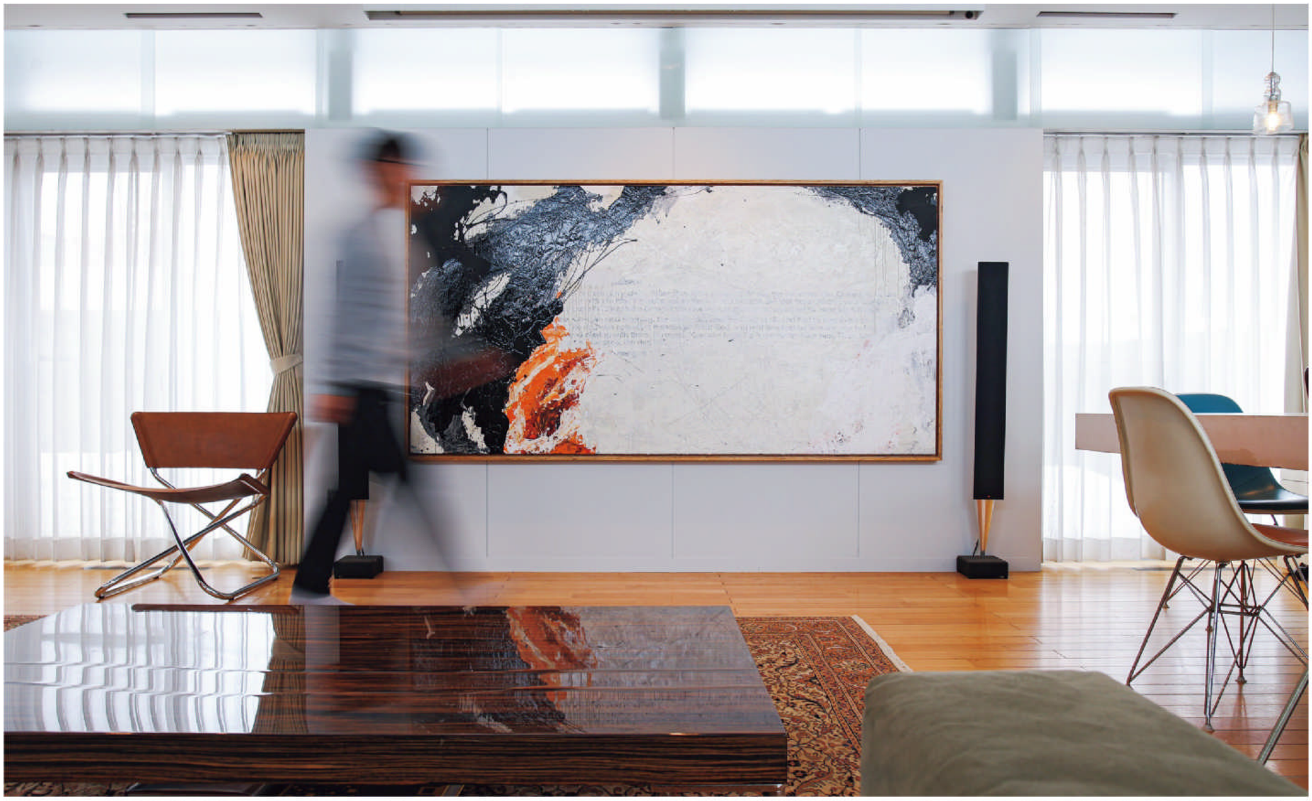
新潟県内で自動車販売業&ギャラリーを営む古俣さんが、自宅設計を依頼したのは東京を拠点に活動する建築家の石井大五さん。その出会いは、県内最大の芸術祭である「越後妻有アートトリエンナーレ」の第一回の開催時（2000年）に、敬愛する芸術家ジェームス・タレルの代表作“光の館”に衝撃を受けた古俣さんが、その作品の設計で携わった石井さんと出会った頃に遡る。「当時はミッドセンチュリー期の家具や建築に傾倒していた頃で、芸術家のジェームス・タレルは憧れの存在でもありました。そんな彼の作品にも携わり、僕のイメージする住宅建築を手掛けていた石井さんにご依頼できたのは幸運ですね」。建設当時、「新建築」などのメディアにも取り上げられ、さまざまなクリエイターが訪れたという自宅は、今なおその美しい世界観は健在だ。「家を建ててから20年も経つので、家具などは時代の経過を感じるプロダクトも多いのですが、それでもなお色褪せない魅力があるのは名作と呼ばれる所以なのだと思います。個性的な外観もあって建築自体に注目が集まることも多いのですが、実は家具など部屋のディテールにもこだわりがあるんです。最近は現代美術やアートへの関心も高まり、リビングの中央に飾っている日本を代表するステンシルアーティストの守矢努さんの作品など、見所も日々アップデートしている気がしています」。自身で自動車展示場とカフェスペースを併設したギャラリーを運営するなど、アートへの造詣も深い古俣さんだからこそ、住居へのこだわりも人一倍強い。現代アートを感じるミッドセンチュリーな住宅は、まさに現在の古俣さんのすべてが詰まっている空間と言える。

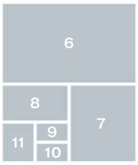




1.〈ハーマンミラー〉社によるイームズラウンジチェアとオットマン。誰もが憧れる名作チェアは、親交の深いファニチャーショップの別注による貴重な限定カラー。その背後に配置されているのは、アキッレ&ピエル・ジャコモのカスティリオーニ兄弟により生みだされた〈フロス〉のアルコランプ。生誕40周年を記念したアニバーサリーモデルで、従来白色の大理石台が黒に変更となったレアな一品。名作と呼ばれる家具たちが、重厚なリビング空間に自然と馴染み、ラグジュアリーでエレガントなムードを演出。　2.キッチンカウンターの椅子たちは、いずれも前述のファニチャーショップ別注の〈イームズ〉によるエッフェルベースのサイドシェル。もちろんオリジナルで、なかでも希少なファブリックとして知られるナウガレザーを使用した逸品を4脚揃えてラインナップ。　3.2階に構えるメッキ鋼板張りのフロアには、奥様の愛車である〈サプライぺーサー〉の本格仕様ロードバイクが。冬にはそのベランダ部分から新潟らしい雪景色が眺められる。　4.2階の中央棟に繋がる亜鉛メッキ製の階段。リビングでも抜群の存在感を放ち、そのスタイリッシュな質感が温かみのある住宅にメリハリを利かせてくれる。　5.さらに別棟2 階へと通じる他の階段も目を引く造りに。アクセントが効いた手すりや、ギャラリーかと見まごうほど真っ白なスキップステアが印象深い。細部にまで凝らされたこだわりこそ、著名な建築家が手掛けた住宅ならではの魅力だ。







6.建築家の石井大五さんらしい採光の美しいリビングの壁面には、現代美術家として国内外で活躍するステンシルアーティストの守矢努さんの作品が鎮座。〈ザノッタ〉社のソファとテーブル越しに見える、その眺めは日常の贅沢そのもの。その両脇には、〈バング&オルフセン〉の定番オーディオであるベオビジョンエクリプスを設置。視覚と聴覚を豊かにしてくれる空間として申し分のないラインナップだ。　7.こちらはマリリン・モンローを始めとする歴史上のセレブたちが数多く愛用したことでも知られる、〈ウラジミールケーガン〉のクッションチェア。背後に見える作品は守矢努さんのもの。　8.リビングルーム中央の階段下には、パークスアンドミニのポップなアート作品が飾られる。モードな世界観が広がる空間とも絶妙にマッチ。　9.こちらは古俣さん贔屓のイラストレーターである白根ゆたんぽさんのオリジナルアート。仕事でも関わりを持つ間柄で、思い入れも深い作品なのだそう。　10.エントランスに飾られたこちらも守矢努さんの原画アート。新潟のアートコミュニティで欠かすことのできない存在である守矢さんの作品は、古俣さん宅でも特別な存在感を放っている。　11.コペンハーゲンのデザイナー、エリック・マグヌッセンによる、北欧プロダクトデザインの境地とまで表されたラウンジチェア。折り畳み式でありながら、ユニークなデザインの革張りモデルで、貴重なオリジナルプロダクト。観賞用のインテリアとしても存在感のある逸品だ。

23

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

こけし燃料主宰
増田勇喜さん

SPEC

居住地域	：	静岡県焼津市
居住形態	：	一戸建て（持ち家）
間取り	：	2LDK
居住年数	：	5年
築年数	：	5年

壁も床もウッドに統一され、キッチンカウンターの腰板も木片を素材としたOSB合板。このウッドたちは月日とともに少しずつ表情を変え、完成から5年を経た今、「うちは南向きとあって日当たり良好。すでに経年変化を見せ始め、木の色合いに深みが出てきました」。

家族の憩いの場であるリビングダイニングはテントの試し張りができるほどに広く、天井からハンモックを吊せるほどに開放的。さらにはヴィヴィッドなオレンジをセレクトした〈ポーラー〉のツーマンテントが、経年によって赤みを帯びたウッドの色彩に映える。

Photo ／ Chie Kushibiki　Text ／ Kyoko Oya

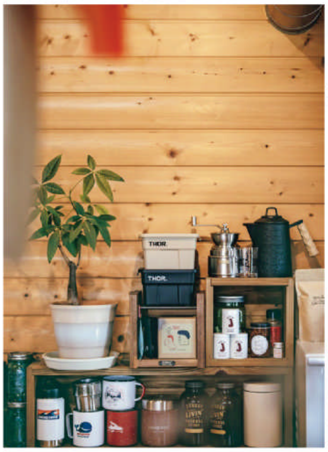
季節とともに移ろう、ウッドに囲まれた薪ストーブのある暮らし。

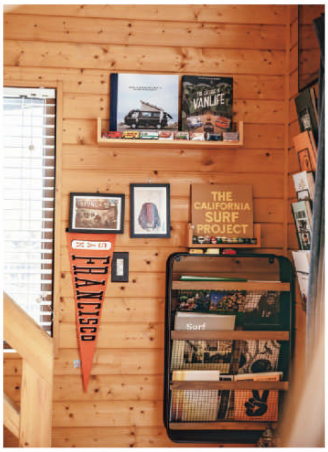
増田さん一家が暮らすのは『ベス』の家。複数あるプロダクトからワンダーデバイスをチョイスしたが、『ベス』の家に共通するのがウッドの装い。増田さんは住まいの購入に至るまでの過程を振り返り、「木の表情がどう変化するのか気になって、新築から築10年まで、モデルハウスを3軒も回ったほどです」と笑う。

そしてもうひとつ、『ベス』の家に共通するのが、薪ストーブを前提にデザインされていること。増田さんは引っ越しを機に薪ストーブに魅了され、今では薪を製造・販売する『こけし燃料』を主宰するほどだ。

「薪割りを始めて実感したことですが、木はおもしろい。年輪も節も同じものはふたつとなく、まさに一期一会。この一期一会の感覚は、サーフィンにも通じる気がして」。そう、増田さんは筋金入りのサーフィン好き。休日はもちろん、いい波が期待できそうな日には出勤前にも海へ出掛ける。「そんな風に自然に影響されながら生活するのが、性に合っているのかもしれません」という言葉どおり、この家に暮らし始めて以来、薪ストーブのオンシーズンとなる10月とオフシーズンになる4月には、リビングの模様替えを欠かさない。

「寒くなると暖色系のインテリアを多用したくなるし、春になって日射しが強くなるのを感じると、部屋に日光を取り込みたくなるんです」。つまり4月の模様替えは、日光を存分に取り入れるための模様替え。増田さんは春の訪れと同時に光を遮るような背の高い家具を取り払い、ポカポカとした日光の温もりを感じながら憩いのひとときを過ごす。自然に影響される暮らしがそこにある。





2			1		
6	5		4	3	
9	8		7		

1.こちらは薪を乾燥・収納するための小屋。増田さんは個性豊かな木の表情を生かすべく、木材や切り株を用いたスツールやプレート、コースターといったアイテムの制作も手掛ける。　2.薪ストーブは〈ダッチウエスト〉のエンライト。最新の燃焼システムであるリーンバーン燃焼が搭載され、高効率かつ低燃費、さらにはクリーンな仕様だ。　3.ウッドの壁を背景にラフに飾ったアートも手前に置かれたサーフボードも絵になるが、ボードは生けるレジェンド、スキップ・フライ氏が直々に削り出したものだそう。　4.メタリック素材のヘキサゴンシェルフとウッドのコントラストが絶妙。　5.壁の一角にディスプレイされた洋書が物語るとおり、増田さんは大のバン好き。薪の製造・販売を始めてからはピックアップトラックに乗り換えたが、かつての愛車はトランスポーター。　6.キッチンの壁際にはコーヒーギアや調味料をセット。ラックは古材を取り扱う知人が制作したオリジナルだ。　7.増田さんはキャンパーの顔も持ち、ギアは2階の個室に収納。ちなみに右手に見えるフォトアートは、サーフフォトグラファーとして活躍したロン・ストーナーの作品。　8.壁にセットされた斧も金槌もファイヤーブースターも、キャンプと住まいの両方で活躍。自宅の庭で焚き火を楽しむことも珍しくないとか。　9.コーヒーテーブルにセットされた〈ヘリノックス〉のタクティカルチェアと〈アシモクラフツ〉のスツールはキャンプにも持ち出す。

24

Living With My Favorites 2023

PROFILE

日本料理店 料理人

赤田直哉さん

SPEC

居住地域	：	東京都江東区
居住形態	：	アパート（賃貸）
間取り	：	2DK
居住年数	：	1年4ヵ月
築年数	：	30年

くつろぎのスペースであり、赤田食堂の客席でもあるリビングはウッディなスタイルで統一。ほどよくグリーンを配置して、バランスのいい印象。中央のパキラは『ダイソー』にて300円で購入。小さな苗から10年かけてサイズアップした。

赤田食堂の心臓部ともいえるキッチンスペース。吊り収納の多さも物件選びの決め手となった。店舗の厨房感があるステンレス製のテーブルには〈カステルメルリーノ〉のスツールを合わせた。このスペースで食事をすることも多いそう。

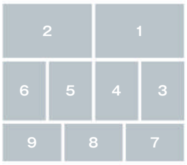
Photo／Kiharu Karube　Text／GO OUT

ナチュラルな空間にアウトドアが差し色。“食”を提供する住まい。

宅飲み以上、ホームパーティ未満。料理人である赤田さんが本業の傍らで不定期開催している「赤田食堂」はそんな存在だ。自宅のリビングスペースを客席に、キッチンを厨房にしたアットホームな空間で、本格的な日本料理が楽しめる。そんな店舗兼住居のような家に引っ越してきたのは、1年半ほど前のこと。「以前は二子玉川の1K18平米の家に住んでいました。当時から自宅を開放して赤田食堂をやっていましたが、キッチンはひと口コンロで、お客さんを呼んでも4人くらいが限界。今の家は広いリビングとキッチンが確保でき、しかも豊洲市場まで近いので、かなり環境が良くなりました」。

新居で重視したのは店舗らしいインテリア。空間を落ち着かせつつ、料理が美味しそうに見えるように、寒色系の照明はすべて暖色に変更。窓にはウッドブラインドを取り付け、部屋全体を木の質感に統一した。「柄モノは最低限に。でも、〈ペンドルトン〉のブランケットや〈マリメッコ〉のアートは主張が強くないので、ちょっとしたアクセントとして置いています」。

ナチュラルなテイストの内装だが〈ハングアウト〉のロールトップテーブルを筆頭に〈スノーピーク〉のローチェア、〈アラジン〉のストーブなど部屋の至るところにアウトドア要素が散りばめられている。「赤田食堂を開催しない日にはテーブルやチェアは収納するので、昔から持っていたキャンプ用品が役に立っています。実は調理スペースのテーブルも〈テンマクデザイン〉のもの。2台並べて、アイランドキッチン的に使っています」。店舗のようなムーディな空間に、アウトドア出自のアイテムが溶け込む。絶妙なバランスがとれた唯一無二の空間だ。



1.リビング壁側の本棚はD.I.Y.したもの。職業柄増えてしまう料理系の雑誌がちょうど収納できる高さに設定している。大学時代に取り壊しとなった校舎から譲り受けた黒板には、本日のメニューを書いて店舗ライクに。　2.プライベート時のリビングはレイアウトが変わる。テーブルとチェアを広げやすいように、床にはモノを置かないのがマイルール。ソファは〈モモナチュラル〉。　3.客席になる〈スノーピーク〉のローチェアは、リビングの片隅に収納。奥には〈ヘリノックス〉のチェアも用意しており、最大8名様までご案内可能。　4.玄関先で看板を照らす〈スノーピーク〉のたねほおずきが赤田食堂開店のサイン。　5.調味料用の造作棚には、自身で焼杉板を取り付けモダンな印象に。以前の住居で使っていたものを流用している。　6.天井いっぱいのグラス棚も自作した。「100脚近くは収納されていると思います。下段は一升瓶やワインボトルがちょうど収まるサイズに調整しました」。　7.〈コールマン〉のハードクーラーは水や米の備蓄庫として自宅で活躍するだけでなく、休みの日にキャンプでも活躍している。現地ではもちろん料理担当なのだとか。　8.元はライトグレーだったシンク下収納の扉はウッド調にD.I.Y.。下段の扉は取り払って、ステンレス製の業務用調理器具が映えるように。　9.自作の靴棚には30足近くのローテクスニーカーが並んでいる。コレクション用ではなく、しっかりと履くものを厳選。

25

Living With
My Favorites 2023

PROFILE

ヨナデザインラボ代表／一級建築士
山本 瑛二郎さん

SPEC

居住地域　：　熊本県熊本市
居住形態　：　マンション（賃貸）
間取り　　：　1R
居住年数　：　6ヵ月
築年数　　：　5年

これもマテリアルにこだわるゆえか。資材のサンプルとして無造作に置かれた木材さえも不思議と絵になる。ちなみに「モノの背景にストーリーのある、古いプロダクトが好きなんです」という山本さんらしく、〈リンナイ〉のガスヒーターもいかにもレトロな面持ち。

Photo／Kazuo Matsumoto　Text／Kyoko Oya

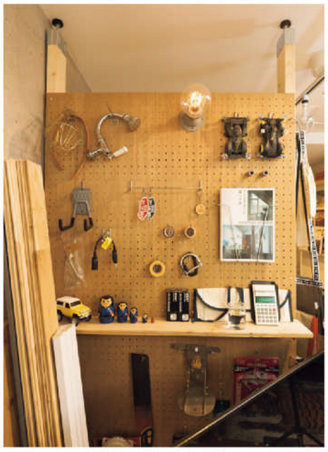
気取りのなさとスマートさを同居させる、ホンモノ志向と緻密な計算。

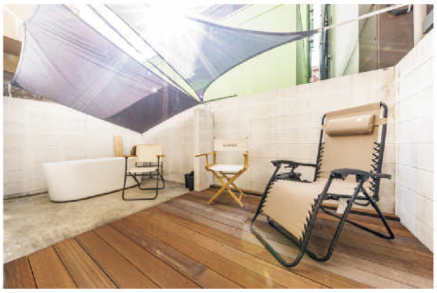
山本さんは熊本を拠点とする設計事務所『ヨナデザインラボ』を営む一級建築士。この部屋は彼にとっての事務所兼住まいだ。決め手となったのは半分が土間、もう半分はフローリングという賃貸には珍しい造り。靴のまま人を招き入れられる土間は事務所の役割を果たし、フローリングは居住空間としても、顧客に向けたモデルルームとしても機能する。

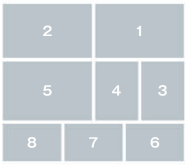
建築士にぴったりの物件だが、この部屋に漂う独特のムードこそ、山本さんの建築スタイル。コンクリート打ちっぱなしの壁にモルタルの土間、スチール製のラックや無垢材を用いたD．I．Y．のラックをはじめ、部屋にはマテリアルの表情をそのままに生かしたラフさが漂うが、全体の印象はあくまでもスマートだ。

マテリアルの表情をそのままに生かしながらもナチュラルなテイストに偏りすぎることなく、そこはかとなく都会的。その秘訣を尋ねてみると、答えは至ってシンプル。「できる限り、フェイクの素材は使わないこと。家具や雑貨の配置は細部にまでこだわること」だ。例えば、備え付けのフローリングには合板が用いられていたため、無垢材や大判のラグを敷くことでフェイク素材をマスキング。家具や雑貨をレイアウトするにも間取りを3Dに起こし、シミュレーションを欠かさないという。

同時に山本さんは建築士らしい作家へのリスペクトから「リプロダクトは購入しない主義なんです」。つまり部屋に漂うムードは、ホンモノ志向と緻密な計算の相乗効果。素材にもプロダクトにも、その配置にも妥協しない姿勢が気取りなく、それでいて洒落た空間を形づくっている。







1.山本さんのモットーのひとつが「素材を大切にすることです」。D.I.Y.には無垢材を多用し、収納ラックはシンプルなデザインにスチールの素材感が際立つ〈メタルシステム〉だ。　2.「躯体のグレー、天井や壁のホワイト、木材のブラウンといったように、ベースカラーを3色程度に抑えることが部屋をうるさく見せないコツです」。そこに赤いラグがアクセントになっているが、柄に用いられた黒が窓のサッシとリンク。大判のラグも違和感なくなじむ。　3.ラックの前には「植物があると部屋全体の印象が柔らかくなります」というグリーンをディスプレイ。　4.有孔ボードの設置に用いた突っ張り式のアジャスターは『P.F.S.』と〈コンクリエイトデザイン〉によるコラボプロダクト。　5.こちらのラックは〈ロイヤル〉の突っ張り式サポートを支柱に自作。背面に張った、フェミニンな曲線を描くワイヤーメッシュがユニークだ。　6.コーヒーにも一家言あり、特筆すべきは〈ハリオ〉のスマート7。ブルートゥースによってスマホと接続。すると湯温から湯量、ドリップのスピードまで細かな設定ができる優れモノ。　7.「サウナが趣味なんです」という山本さん。バスルームでサウナを楽しんだ後は、デッキの敷かれたベランダへ。ベランダに置いたバスタブに水を張り、整うのだとか。　8.モデルルームの役割も果たすベッドスペース。タイガーラグは〈ポストジェネラル〉のプロダクトだが、ソファベッドは意外にも『楽天市場』からセレクト。

別冊ゴーアウトシリーズ大好評発売中です!!

ソロ、ファミリー、グルキャンまで、
千差万別なおしゃれサイトは必見!!

別冊GO OUT
『THE CAMP STYLE BOOK vol.19』
定価：1100円（本体：1000円+税10%）

新しいギア調達の参考になる
達人たちのガチな愛用品。

別冊GO OUT
『CAMP GEAR BOOK vol.7』
定価：1100円（本体：1000円+税10%）

三栄 SAN-EI CORPORATION
販売部 TEL03-6773-5250（受付時間／平日10:00～17:30）　〒163-1126　東京都新宿区西新宿6-22-1　新宿スクエアタワー26F　www.sun-a.com/

趣味や仕事を自分流に楽しむための、こだわりの家たち。

HOUSE BRAND CATALOG

家のブランドカタログ。

人生で最も長い時間を過ごすのは家かもしれません。そんな場所には理想も野望も、すべてを詰め込みたいもの。
ガレージか、土間か、吹き抜けか、それともすべてか。そんな迷える趣味人の心をくすぐる住宅ブランドを集めました。

Text ／ GO OUT

01

フランク・ファントム・ボイドの3モデルは共にガルバリウム鋼板と無垢材の素材感が楽しめる外観。リリース当時、住宅デザインにおいて禁じ手とされていた看板建築を採用したのは〈ベス〉ならではの先見の明ある感性だ。

1.広いウッドデッキと大きな開口部が特徴のモデル"フランク"。家の中と外がシームレスにつながった空間を演出。　2.ウッドデッキは家族や友人など複数人で過ごすにも十分な広さ。　3.デッキとつながる部分は土間にも設定可能。吹き抜けの壁一面を収納スペースにすれば、土間でメンテナンスしたアウトドアギアをそのまま片付けられる。　4.木の温もりを感じられるインテリアも魅力のひとつ。ログハウス出自のブランドならでは。　5.定番オプションの薪ストーブの周りは、家族団欒の空間になること間違いなし。　6.広い開口部と吹き抜けで開放感抜群なリビング。うんていやクライミングウォールを設置して、遊び場を作るのもおもしろい

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

BRAND

BESS

ベス

PICK UP MODEL

WONDER DEVICE

街並みに馴染む外観と木の温もり。二面性を持った「暮らしを楽しむ装置」

「衣」「食」に続いて、「住」についても感性で選ぶ時代が来る。1986年から〈ベス〉が謳い続けている"感性マーケティング"は、現代の自由で自然な暮らし方を求める流れにマッチしている。ラインナップには、特大のベランダ「NIDO」や屋根裏空間「グルニエ」が魅力のログハウス「G-LOG なつ」、現代の古民家「程々の家」など、住む人の創造力を発揮させてくれる個性的な木の家が揃う。機能や性能よりも、住む人の暮らし方にフォーカスした家づくりは〈ベス〉ならではだ。

その中でも、自由なカスタムで自分らしい暮らしを表現できるのが「WONDER DEVICE」だ。リビングとウッドデッキをつなげたり、趣味用品のメンテナンスもできる広い土間を設けたり。ベースとなる3つのモデルから、外観と居住空間をチョイスすることが可能だ。野望を持って挑むほど、おもしろい家を、暮らしを実現できる。そんな規格住宅ながらも、型にハマりすぎない住まいになっている。

02

意匠性と耐久性を兼ねた、ガルバリウム鋼板外壁を採用。広い開口のガレージスペースや屋上のワイドバルコニーを備え、遊びの自由度が高いモデルとなっている。そのほか、より導線がスマートに設計されたコンパクトタイプも。

BRAND

DULTON HOME

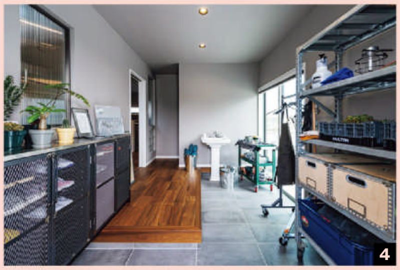
ダルトン ホーム

PICK UP MODEL

DH PLAN

2

1


4

3

6

5

**ダルトンの魅力を隅々まで詰め込んだ、
自分らしいライフスタイルを楽しめる家。**

インテリア雑貨メーカー〈ダルトン〉が手掛ける、ホームプロダクト。生活にまつわる雑貨や道具を知り尽くしたブランドならではの、“モノを通した暮らしの豊かさ”を提案してくれる。たとえば、ガレージ。車を愛でるスペースとしても、趣味に没頭する部屋としても使えて、同じ空間でも住む人それぞれがどんなモノを置くかによって、さまざまな表情を見せてくれるのだ。

自由度の高い設計は、ラインナップにも生かされている。広々としたワイドバルコニーやガレージスペースのある「DH PLAN」や、収納やスマートな生活導線を考えた「BASIC PLAN」シリーズなど、家族のライフスタイルに合わせて自由に選べるプランが揃っているのも魅力的。

また、〈ダルトン〉の家具や雑貨と相性がいいインダストリアルな空間デザインは、「どんなモノを置こうか」、「どんなふうに過ごそうか」と、思う存分想像を膨らませずにはいられない。

1.広々としたLDK。窓を開くとウッドデッキとシームレスにつながり、日常的にアウトドアを楽しめる。 2.吹き抜け空間でつながる2階スペース。 3.オプションのワイドバルコニーは、広さを生かしてさまざまな楽しみ方ができる空間。 4.玄関から奥のフリースペースまでをひとつなぎにする土間。D.I.Y.や自転車のメンテナンスなど、土間でしかできない半屋外的な使い方もできる。
5.玄関と庭の2方向からの出し入れが可能なガレージ。車やバイクはもちろん、サーフボードなど大きなギアも出し入れしやすい。
6.ブランドを代表するDH PLAN。オリジナルのドアやタイルなど、ディテールまでこだわり抜けるマテリアルのオプションも注目。

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

 ㈱ダルトンホーム・ディベロップメント株式会社　mail：dultonhome.info@gmail.com　http://www.dultonhome.com/

03

種類豊富なログハウスモデルが揃う<タロ>。自由設計を基本とし、プランの中にある好みのデザインをベースにしながら、住む人の暮らし方や希望に合わせて大幅なアレンジが可能。自分に合った特別な一棟に出合おう。

1.自然を感じるログの壁や天井に囲まれて、木の温もりがあふれるメインスペース。 2.リビングの上にある吹き抜け空間には、キャットウォークの設置も可能。 3.土間や和室など、住む人の暮らし方に合わせたスペースにアレンジできる。 4.リビングを眺めながら料理を楽しめるキッチン。広々としていて、作業がはかどること間違いなし。 5.ダイニング&キッチンスペースは、あえてリビングよりも天井を低くすることで、適度な籠り感を実現。家族でゆったり食事するのに最適な場所だ。 6.2階の奥には、屋根裏部屋のように階段で上がれるロフトスペースを完備。収納スペースとしてはもちろん、子供部屋や書斎など、さまざまな用途で使いやすい。

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

BRAND

TALO

タロ

PICK UP MODEL

HI-4A+LOFT

木の温もりとこだわりを体感できる、オーセンティックなログハウス。

1988年の創業以来、ログハウスに特化した家づくりを続けるブランド〈タロ〉。特徴のひとつが、2階までログを積む“総ログ©仕様”。2階やロフトを在来工法2×4で作るメーカーが多い中、〈タロ〉は徹底してログにこだわっているため、家1棟に使う木の量も圧倒的に多い。そんな自然の木の温もりを感じる家は、蓄熱性、断熱性、調温性に優れているので、冬は温かく、夏は涼しく、一年を通して快適に暮らせる。ブランドのこだわりと住む人の暮らしやすさを叶える、そんな家づくりが実現した。

「HI-4A＋LOFT」は、そうしたブランドのこだわりが詰まった木の温もりと、人気の平屋タイプを組み合わせたデザイン。ログの壁や天井に囲まれた吹き抜けのリビングは、開放感抜群で心地よい空間。平屋ベースながら、2階には収納用として使える約43㎡のロフトスペースも。まさに憧れの屋根裏部屋付きのログハウスのような暮らしを実現できる、夢のモデルとなっている。

04

平屋と2階建て、2つの建物をひとつにまとめたような大胆なレイアウトが特徴なモデル。1階の外と中をフラットにつなぎ、リビングと庭が一体となったシームレスなデザインで、開放感と使いやすさを実現した。

BRAND

LIFE LABEL

ライフレーベル

PICK UP MODEL

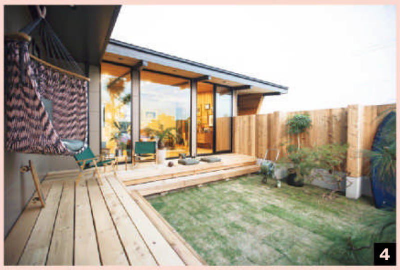
FREAK'S HOUSE

エンターテインメント発想の家づくりで
住む人のライフスタイルをもっと楽しく。

"House is Entertainment(家を、暮らしをもっとエンターテインメントに)"をコンセプトに、家を舞台にした多様性のあるライフスタイルを提案するブランド〈ライフレーベル〉。これまでにも、クリエイティブ総合商社〈アマダナ〉や空間デザインを手掛ける〈ツールボックス〉などと手を組み、コラボレーション住宅を展開してきた。その中でも人気のひとつが、〈フリークスストア〉とコラボした「FREAK'S HOUSE」だ。アパレルブランドとのタッグという意外性もさることながら、従来の規格住宅とは一線を画したデザイン性の高さが注目を集めている。"つながる＝SESSION"をテーマに、リビングとウッドデッキがシームレスに繋がった1階スペース、階段上には書斎やオープン収納として使えるシェアスペースを設けるなど、空間設計も実にユニーク。家づくりとファッション、それぞれの持つ個性がクロスオーバーしたコラボレーションをぜひその目で見てほしい。

2

1


4

3

6

5

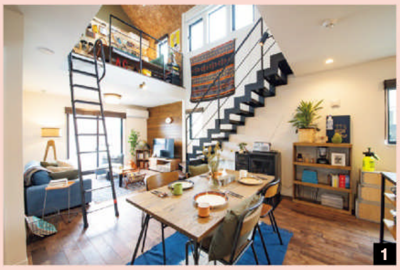
1.アメリカンローカルハウスをイメージした、木の温もりあふれるリビング。 2.1階部分は、大空間の吹き抜け仕様。LDKと2階のシェアスペースがリンクするような作りに。 3.庇(ひさし)のあるカウンターキッチンは、まるでショップのような見た目。1階部分のアクセントになっている。 4.L字型に設置された広々としたウッドデッキ。屋外ながら"もうひとつの部屋"として、自然と人が集まるようなスペースとなっている。 5.2階の階段上あるシェアスペース。デスク&収納棚が備わっているので、仕事場や勉強部屋に最適。 6.メインのベッドルーム。ウッドデッキに面しているので明るく、目覚めの良い朝を迎えられそうだ。

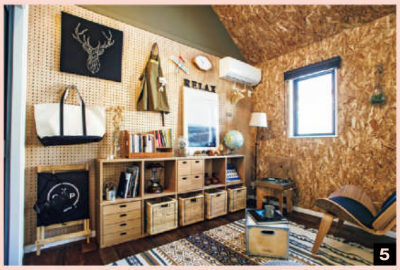
※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

 問LIFE LABEL 事務局 tel：03-4400-7890 http://lifelabel.jp/lineup/freaks-house

05

外観はブラック×ウッドのシンプルな色使い。経年変化を感じさせにくいマットブラックで統一しつつも、アクセントに木目パネルを配置することで重厚すぎない印象に。飽きのこない普遍的なスタイルは、一生涯の相棒としても◎。





1.開放感抜群な吹き抜けのLDスペース。21帖とゆとりのある広さで自然と人が集まるような場所に。　2.リビングのアクセントになる無垢板のパネルは、見た目のエレガントさだけでなく、天然木の保湿・防音・断熱といった機能性もプラス。　3.対面式キッチンで家族や仲間と語らいながら料理を楽しめる。　4.食器棚は木の棚板とメタルフレームを組み合わせた「ウッドワン」の壁掛けタイプ。調理スペースにシックな印象を。　5.リビングからハシゴで直結する秘密基地"BASE"。アウトドア用品をレイアウトするもよし、作業スペースにするもよし。　6.大きな窓から陽光を存分に感じられるベッドルーム。ウォークインクローゼットも設けられている。

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

BRAND

suzukuri

スズクリ

PICK UP MODEL

Livin' BASE

自由に自分らしさを表現できる、“ライフスタイル” ファーストの家。

趣味を大切にしながら、家族との暮らしを楽しめる。〈スズクリ〉が提案しているのは、そんな理想を叶える住まい。ライフスタイルを重視するブランドであるが故に、ラインナップは実にユニーク。世界的電動工具ブランド〈ブラック・アンド・デッカー〉と異色のタッグを組んだ「D.I.Y. HOME」がその代表例だ。なんと本格D.I.Y.が楽しめる工房が設けられている。さらに外観やインテリアを自分流にカスタムできる「ヴィエント」などのオリジナルモデルも必見だ。
趣味を立てながら、自由度の高さも追求するその姿勢は「Livin' BASE」にも表れている。複数プランの間取りはもちろん、ギア収納棚やウッドデッキ、天窓など多彩なオプションは垂涎もの。そして、趣味人の心をくすぐるのが"基地／BASE "と呼ばれる、リビング直結のスペースだ。幼い頃に憧れた秘密基地を彷彿させるその空間は書斎やアトリエ、あるいは趣味部屋と、想像力を掻き立ててくれる。自分らしさを表現するための良きキャンバスになるに違いない。

外観のデザインは、左右で奥行きが異なるL字型の個性的な構造。バルコニーと玄関上部の外壁には、天然の木材が標準仕様で、ワントーンに統一されたデザインの差し色としても相性抜群。自由度の高さも魅力だ。

BRAND

BinO

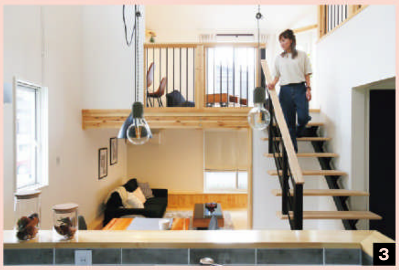
ビーノ

PICK UP MODEL

B-CRAFT

“自遊” に描ける中間階での暮らし。自分らしくクラフトする家。

スキップフロア専門ブランドとしてスタートした〈ビーノ〉。現在では平屋や２階建て、タイニーハウス、ログハウスと多様な住宅を展開しているが、各モデルには“自遊に、くらす。”を実現させるという共通項がある。“自遊”とは新たな発見に満ち溢れていること。そんなコンセプトを裏付けるようにラインナップは「窓を楽しむ家」や「ママが自遊になれる家」など、目の付けどころの斬新さが光る。トラックを移動型店舗にアップデートできる組み立て小屋まで取り扱うという、その企画力はまさしく“自遊”。
今回はブランドの起源であるスキップフロアから「B-CRAFT」をピックアップ。４層からなるスキップ構造を生かした開放的な吹き抜けと、間取りのカスタマイズ性が特徴だ。自分にぴったりなスペースで過ごせる自由さと、大空間を家族とシェアしているという安心感が絶妙なバランスで両立されている。0.5階や1.5階という中間階からの新鮮な視点。そんな家で過ごす、何気ない毎日は新たな発見にあふれているかもしれない。



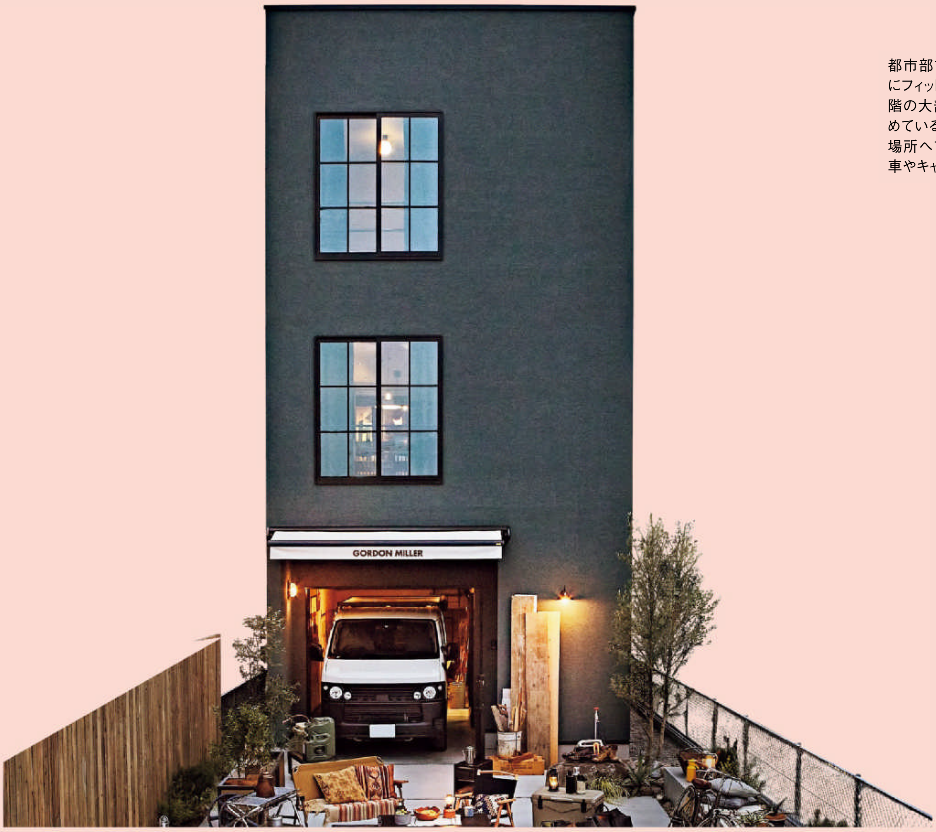
1.スキップフロアならではの0.5階～1階～1.5階～2階と4フロア分がつながった吹き抜け。開放感のある空間を味わえる。 2.開放的なスキップフロアの間取りでライフスタイルに合わせた暮らしが可能。 3.1階からは0.5階と1.5階が見渡せる。近すぎず遠すぎない、ちょうどいい家族の距離感を作り出せる。 4.吹き抜けによって太陽の光が家中に広がる。中間階をリビングにすれば、導線的に自然と家族が集まる場所に。 5.エントランスに有効ボードを設置するなど、アイデア次第で自由な使い方が出来る魅力も。 6.最上階となる2階はベッドルームにするも、子供部屋にするも自由。暮らし方次第で部屋数もフレキシブルに。

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

 ㈱BinO 本部 mail：info@bino.jp https://www.ibiken.co.jp/

07

都市部でも郊外でも、住みたい土地にフィットしやすい3階建てタイプ。1階の大部分をガレージスペースが占めているので、家中どこからでもこの場所へアクセスしやすいのが特徴。車やキャンプ好きに最適な間取りだ。



1.広い開口のガレージスペース。車やギアの収納場所としてはもちろん、家族や友人との憩いの場としても使える。 2.開放感のあるスキップフロアを採用し、ガレージと各フロアがつながるシームレスな仕様。2階のリビングからは窓を通してガレージを眺められる。 3.エントランス部分をアウトドアリビングとして使った好例。 4.3階には、ベッドルーム+子供部屋や客間として使える2部屋の計3部屋がある。 5.2階のダイニング&キッチンスペースは、コンパクトな導線で日々の家事がしやすい設計となっている。 6.同モデルの2階建てタイプも展開。より広々とした間取りやフリースペースがあり、自由度の高い暮らしを叶えてくれる。

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

BRAND

Dolive

ドライブ

PICK UP MODEL

THE HOUSE GARAGE PROJECT by GORDON MILLER

無限大の楽しみ方を想像させてくれる個性豊かなコラボレーションモデル。

“『住みたい』をもっと自由に、シミュレーションして楽しむ家づくり”を掲げている〈ドライブ〉。メディアとしてさまざまな人々の家づくりを発信することで、理想のライフスタイル発見のサポートをしている。そんなブランドが手掛けるプロダクトもまた、個性豊かなものばかり。中でも注目は、車愛好家たちに人気の高い〈ゴードン ミラー〉とのコラボレーションモデル。ガレージユースやカーライフを前提としたモノづくりを掲げる同ブランドと取り組んだのは、“家まるごとガレージの新空間”。住宅の中心に大きなガレージスペースを置き、リビングをはじめとするさまざまな箇所からガレージへダイレクトに行き来したり、車を眺めたりできるような大胆な間取りとなっている。モルタルやアイアンなどを生かした趣のあるデザインはそのままに、２階建てのフラットタイプ、３階建てのコンパクトタイプの２パターンを展開。住む人の暮らし方に合わせて選べるのが嬉しい。

08

こちらの外観は〈DOD〉製品の「エイテント」を模したカラーリング。ベージュ×グリーンのアースカラーで構成することで、ナチュラルな印象を感じさせることができる。シンプルすぎない独特なシェイプと相まって、バランスのいい印象だ。

BRAND

Universal Home

ユニバーサルホーム

PICK UP MODEL

キャンパーの住みか

2

1

4

3

6

5

“家族がワクワクする”
キャンパーの“欲しい”が詰まった家。

全国フランチャイズ展開の注文住宅メーカー〈ユニバーサルホーム〉は、近年のアウトドアブームに着目。商品のコストパフォーマンスやユーザーとの距離感に共通点を感じたアウトドアブランド〈DOD〉と異色ともいえるコラボ企画をスタートした。

キャンパーたちのわが家への理想をソト遊びを知るブランドならではの目線から実現し、日常生活での快適性を全国規模のハウスメーカーのノウハウでカバーする。両者の強みが融合したのが「キャンパーの住みか」だ。豊富な収納はもちろん、濡れたテントを干せるガレージや趣味用品をメンテナンスできる土間空間(アトリエ)など、ソト遊び好きにはたまらない設備が充実している。一方で「地熱床暖房」「高性能外壁材ALC」など〈ユニバーサルホーム〉の知見を生かし、室内環境の快適さも確保。趣味も日常生活も欲張りに追求することができる。身近にキャンプを感じながら、またキャンプに行きたくなる家。アウトドア好きならば、視野に入れざるを得ない存在である。

1.LDKからはアトリエやガレージのキャンプギアがいつでも眺められる。 2.外壁面のフックにタープを取り付け、プライベートなアウトドア空間に。 3.ギア収納はもちろん、天井のフックで濡れたテントやシュラフも干せる。 4.ウッドデッキはアウトドアリビングとして大活躍。 5.現在実棟が見学できるのは木更津(千葉県)、日出(大分県※写真モデル)、東根(山形県)、市原(千葉県)、御殿場(静岡県)、八代(熊本県)の6ヵ所。今後は島田(静岡県)、那須塩原(栃木県)、亀岡(京都府)に誕生予定。 6.〈DOD〉と〈ユニバーサルホーム〉の定めた基準をクリアすると「キャンパーの住みか」として認定され、マグや玄関マットなど特別仕様アイテムが手に入る。

 ユニバーサルホーム tel：03-5542-3111 https://www.universalhome.co.jp/

09

ボックス型のシンプルな形状に、縦格子のルーバーがアクセントになった、新しくもどこか懐かしい外観。ルーバースクリーンの位置やカラーは変更可能なので、自分好みの組み合わせにチューニングできるのもひとつの楽しみだ。

1. “そらのま”には天井がない代わりにバーゴラが設置されている。日差しをやわらげつつ、落ち着いた雰囲気を演出。　2.天井がない大胆な造りは、家庭菜園やバーベキューに最適。　3.巨大なFIXガラスと引戸からなる「ビスタウィンドウ」。室内と“そらのま”に一体感と広がりを与える役割を担う。　4.キッチン前のダイニング収納。コンパクト住宅ながら、スペースを有効に活用して収納に頭を悩ませる心配もない。　5.家族と顔を見合わせながら各々の過ごし方ができるようにと、リビングと屋外スペースは隣り合わせ。6.外壁のルーバーが家の外からの目隠し的な役割を果たす。陽が落ちてから“そらのま”でライトをつけても気兼ねなく過ごせる。

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

BRAND

HEBEL HAUS

ヘーベルハウス

PICK UP MODEL

そらのま+

自然との境界をミニマムにした、陽だまりと風を満喫できる家。

人生100年時代を念頭に、“LONGLIFEな住まい”を提案する〈ヘーベルハウス〉。人気ハウスメーカーとしての地位を支えているのが、あらゆるニーズに応えられる豊富なラインナップだ。定番の2階建て・3階建てモデルには、玄関先に半屋外空間のある「のきのまent」やヴィラ風の「RATIUS RD FINEST VILLA」などテイストの異なる個性派が揃う。そのほかにも二世帯向け、子育て世帯向け、賃貸併用etc…とニーズに特化しており、多様化する暮らし方に正解が見つかりそうだ。

中でも、都市に住むアウトドア好きにぴったりなのが「そらのま+」。2階のリビングに併設されたオープンエアの空間“そらのま”は、屋根がない斬新な設計。さらに外壁が縦格子のルーバーになっていることで、都市でも視線を遮りつつ存分に風と光を感じられる場所になっている。家のプライベート感を保ちながら、“ソト”空間の魅力も追求された住宅。風呂後に外気浴に使うも、テントを張って家キャンプするもよし。その可能性はまさしく青天井だ。

10

ひと際目を引く大胆な斜め屋根が特徴的な外観デザイン。シンプルでありながら、外壁・屋根・建具でそれぞれ違う素材を使用して、それぞれがアクセントとして引き立て合っている。見る角度で表情が変わる、ユニークなルックスだ。

BRAND

and STANDARD

アンドスタンダード

PICK UP MODEL

Loff

2

1

4

3

6

5

シンプルさと利便性を両立させた家族の"ちょうどいい"を叶える家。

スタンダードでありながら、住む人の趣味嗜好や、これから先の未来でやってみたいことをひとさじ加えられる。そんな程よい余白を持つ住宅ブランドが〈アンドスタンダード〉だ。全5モデルに共通するのは、住む人それぞれにフィットするように考えられたプラン。例えば、平屋タイプの「RANCE」は2LDKと3LDKのプランがあり、「もうひと部屋欲しい」という声も、「コンパクトタイプで手頃に抑えたい」という声も叶えられる。また、シンプルな外観の「CUBIC」は、都市部に多い間口の狭い土地にも対応した大きさ。そんな、一見普通でありながら、自分に合った住まいを見つけられるのが魅力だ。注目すべきは、1.5階建てモデルの「Loff」。平屋のようにワンフロアで完結できる便利な生活導線と、2階建て住宅のような部屋数の多さ、そのどちらも叶う間取りとなっている。玄関横の土間スペースは、キャンプ道具はもちろん、サーフボードや自転車・バイクまで収納できる広さ。住む人にとっての利便性とシンプルさを突き詰めている。

1.家族の憩いの場であるLDK。どんなインテリアとも相性のいい、白壁と大きな窓が特徴的。　2.三角屋根の部分は天井の高い吹き抜けスペースに。プライベート感と開放感、その両方を味わえる。　3.ダイニング脇に設けられたワークエリア。仕事や子供の勉強がはかどりそうな、ちょうどいい広さ。　4.お手入れのしやすいシステムキッチンを採用した台所部分。広々としたリビングを眺めながら作業ができるのが嬉しい。　5.カウンターキッチンと距離の近い食卓スペース。忙しい日々を緩和してくれる便利な導線となっている。　6.玄関横にある土間収納。十分な広さなので、収納場所としても、ちょっとしたフリースペースとしても活躍する。

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

 ㈱株式会社オレンジハウス　tel：0120-965-924　https://www.andstandard.com

装飾やデザインをミニマムにしたシンプルさゆえの洗練された外観。6畳という四角いピースの組み合わせが、調和のとれた美しさを引き出している。見た目はもちろんだが、耐震性の高さも規格化されたピースのメリット。

2

1

4

3

6

5

1.室内とも屋外ともいえる中庭。優雅にひとりで過ごしたり、仲間と晩酌したりと想像力次第でさまざまな可能性。　2.6畳のピースを3つ並べるとLDKに。大開口の窓で存分に光を取り込み、家族との会話もはずむ明るい空間。　3.リビングは温もりのあるウッドに、オリジナルクロスのブラックとホワイトで個性的な印象をプラス。　4.床には柔らかなパイン材を採用。経年によって色艶の変化を楽しめる。細い幅木など細部まで気を配った高いデザイン性も魅力。　5.フレームが細めに設計された窓は、開放感を最大限に発揮する。ナチュラルな空間にシックなブラックが程よいコントラスト。　6.日が暮れれば、中庭はよりムーディな落ち着きある空間に。

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

BRAND

casa

カーサ

PICK UP MODEL

casa cago

“6畳＝1ピース”の規格化で、ライフスタイルの最適解を追求できる家。

“建築家と作る家”をテーマに注文住宅のデザイン支援を行なっている「カーサプロジェクト」。同プロジェクトで、目指すスタイルが決まっている人向けに展開されているのが規格住宅の〈プロダクトカーサ〉だ。美しさと品質には徹底的にこだわりながら、中間マージン削減による低価格も両立している。日本の伝統美“大和比”から生まれた「カーサアマーレ」や南欧の邸宅テイストの「カーサカリーナ」など、エッジの効いた商品が揃っていて、どんなに色濃いこだわりも受け止めてくれそうだ。
特にこだわりを追求できるモデルが〈カーサカーゴ〉。6畳＝1ピースとして規格化された空間を自由に組み合わせることで、パズルのような家づくりを楽しめる。家族構成や暮らし方、土地に合わせて自分だけにベストフィットな形を見つけられるのだ。もうひとつの特徴が、庭とつながる屋根付きの中庭。天候や季節に関わらず、居心地のいい空間は、アウトドアリビングとして家の主役となること間違いなし。

小屋をイメージした立方体フォルムと大きな開口部が特徴。7.51坪のコンパクトな造りながら、趣味を楽しめるゆとりのある居住スペースと広いオープンテラスを有する。さまざまな生活スタイルに対応できる多様性の高さに注目。

BRAND

JIBUN HOUSE

ジブンハウス

PICK UP MODEL

weekend haus.

シンプルさと利便性を両立させた家族の“ちょうどいい”を叶える家。

住む人の価値観に寄り添いながら、柔軟で真摯な家づくりを掲げる〈ジブンハウス〉。家は“白いハコ”であると考え、シンプルで機能美あふれるスタイリッシュなモデルを多数展開している。特徴的なのが、「スマートカスタム」を利用したシミュレーション体験。オンラインで気になる規格モデルを選択すると、間取りやオプションを自由にカスタマイズでき、自分好みの家を作れるのだ。VR内覧もできるので、自分の好きなときに好きなだけ、理想の家づくりにトライできる。

数あるラインナップの中でもオンライン体験をしてみたいのが、開放的な外観が特徴的な「weekend haus.」だ。コンセプトは“週末を、ジブンらしくデザインしよう”。自宅でもない、ホテルでもない、第3の居場所である“自分だけの小屋”を低価格で手に入れられる、そんな夢のあるモデル。週末の非日常的な自分だけのプライベート空間で、自分らしいライフスタイルを描いてみるのはいかがだろうか。

1.趣味を極めた小屋をテーマにした本モデル。ガラス張りの広い開口で、季節を問わず自然光が差し込む。　2.屋外と家の中がシームレスに混ざり合う。オプションの広いデッキスペースは、家族や友人が集まって団欒を楽しむのにぴったりだ。　3.デッキにはプールを設置可能。プライベート感あふれる特別な演出。　4.大きなベッドを設置できるゆとりのあるメインスペースは、外の景色を眺められる造り。　5.小上がりになった居住スペースで、生活シーンの使い分けが可能。床材はカフェなどでよく使われる杉無垢板を採用。濡れたり汚れたりすることを気にせずに使いやすい。　6.窓の外を眺めながらバスタイムが楽しめる浴室で1日の疲れを癒す。

※掲載写真は、アレンジやオプション仕様を含みます。

 JIBUN HAUS. 株式会社　tel：03-5774-6660　http://jibunhouse.jp

Editor in chief
Takuro Seki

Editor
Masashi Echigo（RIDE inc.）
Shiyori Kawamura（RIDE inc.）
Masazumi Nagao（RIDE inc.）
Sachiko Matsuda（RIDE inc.）
Mitsuaki Furugori

Advertising staff
Tomoaki Suzuki
Gakuji Onozato
Mamoru Takahashi
Yasuyuki Abe
Hiroaki Takahashi
Yui Okutani
Kotoe Nakahata
Moe Noguchi
Tomohiro Ohta
Masafumi Takahashi

Designer
DAISUKE TAKEUCHI（daisketch）

Producer
Mitsuru Takeshita

Creative Director
Osaka Umeda（60MW）

web.goout.jp

GO OUTの公式ウェブサイト、毎日更新中!!
公式SNSも絶賛稼働中です。

公式Facebook
@GO OUT
@gooutonlinejpn
@GOOUT CAMP

公式twitter
@GOOUTmagazine
@goout_online
@goout_camp

公式Instagram
@gooutjpn
@gooutonlinejpn

ニューズムック
GO OUT Livin' Vol.17
2023年3月11日発行

発行人：伊藤 秀伸
編集人：関 拓朗
印刷所：図書印刷株式会社
発行所：株式会社三栄
〒163-1126 東京都新宿区西新宿6-22-1 新宿スクエアタワー26F
編集　tel：03-6303-1609（ロクマルマガジンワークス）
受注センター　tel：048-988-6011　fax：048-988-7651
販売　tel：03-6773-5250

定価：1100円（本体1000円＋税10%）

■本誌掲載記事・写真などの無断掲載、複写を禁じます。

NANGA SHOP HARAJUKU
東京都渋谷区神宮前6丁目16-19 原宿WATビル101
TEL 03-3409-1941　営業時間 11:00-20:00
定休日 水曜日

NANGA SHOP TOKYO
東京都目黒区碑文谷2丁目10-21 ディアハイム碑文谷101
TEL 03-6303-1688　営業時間 11:00-20:00
定休日 水曜日

NANGA SHOP NAGOYA
愛知県名古屋市中区栄3-25-39 サカエサウススクエア1B号
052-242-1995　営業時間 11:00-20:00
定休日 水曜日

NANGA SHOP OSAKA
大阪府大阪市西区南堀江1-22-18 TEL 06-6567-8171
日～木曜日 11:00-19:00　金/土曜日 11:00-20:00
定休日 水曜日

NANGA SHOP TOHMA
北海道上川郡当麻町市街6区
TEL 0166-56-7972　営業時間 11:00-18:00
定休日 水曜日・木曜日

NANGA SHOP KUSATSU
滋賀県草津市南山田129-1
TEL 077-515-2888　営業時間 9:45-19:30
定休日 火曜日

@ nanga.official
@ nanga_official　@ nangausa
nanga.jp

ニューズムック GO OUT Livin' Vol.17 2023年3月11日発行
発行人：伊藤 秀伸 編集人：関 拓朗 発行所：株式会社三栄 〒163-1126 東京都新宿区西新宿6-22-1 新宿スクエアタワー26F 受注センター TEL048-988-6011 FAX048-988-7651 販売部 TEL03-6773-5250

THE HOUSE GARAGE PROJECT by GORDON MILLER

Dolive × GORDON MILLER

Doliveと GORDON MILLERで考える、新しいガレージライフの提案

いまの時代にあったガレージライフとはなんなのか。
最近ではガレージをシームレスな空間として
楽しむ人も増えてきた。
趣味のアウトドアギアを置いたり、
音楽を流して友人と楽しんだり。
今はもう"ただの車庫"でも"男の隠れ家"でもない。
そこは"仲間や家族とも一緒にたのしむ場所"
わたしたちはそれを新しい「ガレージハウス」の
カタチとして、これまでの「ガレージ」に対する
概念を変えていきたい。

"GARAGE" MEETS YOUR LIFE!
全員、たのしい。そんな家。

THE HOUSE GARAGE PROJECT
by GORDON MILLER

◀ プロジェクトの詳細はこちら！

@dolive.media

定価：1100円（本体：1000円＋税10%）

9784779647635

雑誌 66731-07
SAN-EI CORPORATION
PRINTED IN JAPAN 図書印刷

ISBN 978-4-7796-4763-5 C9476 ¥1000E

1929476010001